

---

# 神様の絵の具

蔡鷺娟

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

神様の絵の具

### 【Nコード】

N8097Z

### 【作者名】

蔡鷺娟

### 【あらすじ】

交通事故で恋人を失った高校生のアキ。悲しみにくれる彼女を見守る家族。ある朝、アキの目の前に翼を持った天使が現れた。それは、失った恋人と同じ姿をしていて……。

どうしようもないことや、逃げられない運命があつて、それでも心だけは自由だと、想うことだけは自由でありたいと、そう願って創作しました。震災の後で不愉快に思われる方もいらっしやるかもしれませんがせん。でも、想いが伝わればと願っております。

## 序

青年は空の中に立っていた。

それはちょうど、透明なガラスの板の上から、地上を見下ろしているような感覚。

けれども東京タワーの展望台もこんなに高くはなかったし、と青年 隼人<sup>はやと</sup>は内心でこちる。足元もそうだが周りに一切掴まれるものもないことが、より一層の恐怖をあおって無意識に体が震えた。

茶色がかつた短い髪を風に躍らせた隼人は、確かに立っているというのに足元には何も無いという不安感にやっとの思いで慣れ、この状況を作り出した隣に立つ小さな老人を横目で見た。

隼人の腰ぐらいまでの身長しかない、小柄な老人は、ふさふさの白髪と膝近くまで伸びた白いふわふわな髭がご自慢のようだ。絵本の世界から飛び出してきた小人のような様相であるが、笑い方が独特で、歯をむき出しにして「しっしっし」と笑う。だがどんな顔をしても可愛らしい部類に入ってしまう、そういう得なタイプだ。先ほど聞いたところによると、雲を司る神様なのだという。

この小さな神様と対面してから十分も経っていない。ものすごく気さくに声を掛けられ挨拶し、気がついたらこの見渡す限り遮るもののない空の上にいた。もし高所恐怖症だったら今頃気絶していただろうな、と隼人は全くどうでもいいことを考えたため息をつく。この世界に来てから今までの常識やらなにやらは全く通用しないことを痛感していたため、この突飛な状況を受け入れられるだけの余裕

はあった。当の老人は先ほどから懐を探り、何かを探しているようだ。

小さな空間をどれだけ整理できていないのか、しばらくごそごそしていたが、ようやく何か缶のようなものを引っ張り出した。自慢げに、にっ、と笑って見せてくれたその缶の中に入っていたのは、無色透明の液体。銀色の缶の底が見えるほどに透明であるが、水のようにさらりとはしておらず、とろっとしているようだ。

老人はにやりと笑って「これは特殊な絵の具なのじゃ」と言った。絵の具だ、と言われても、隼人の記憶ではこんな色の絵の具を使った覚えはない。透明ではただ紙が濡れるだけだと首を傾げる。

にやにやと笑ったままで、老人はおもむろに缶の中に指を入れ、その絵の具をすくった。皺だらけの指に光るその液体は、透明な蜂蜜のようにとろりと滴った。

一体それで何をするのだろう、と隼人が考えていると、老人は絵の具をつけたその指を、目の前の空に向かって横一文字に薙いだ。すると。

青い青い空の中に突如現れた白い雲。

それは老人の指が走るほうへ緩やかに伸びていく。隼人が声もなく目を瞬かせているのをちらりと見た老人は、楽しそうに笑いながら更に絵の具を指に乗せ、青を埋め尽くすように真っ白な雲を連れていく。

先ほどまで雲ひとつない、文句のない快晴だったはずの空に、今ひとつ、またひとつと生まれていく雲。隼人は無言のまま、老人を見つめた。雲を司る神なのだと、そういった老人を。

「しっしっし」

しわしわの顔にさらにしわを寄せて老人は笑った。体の揺れにあわせて、ご自慢の白い髭もふわふわと揺れる。

隼人は、もう一度雲に目をやった。

青空にまつすぐに伸びた白いライン。強い風に流されてその姿を徐々に変化させ、そして緩やかに空に溶けていく。

隼人は思わずため息をついた。

ああ、こんなふうに

こんなふうに雲を描くところを見せてあげられたらなあ

「行くか？ 見せに」

老人は、透明なその絵の具に濡れた指を動かしながら言った。目線は雲の方に投げられているが、間違いなく自分に向けて発せられた言葉に、隼人は瞬いた。

「え？ はい？」

まるで心を読まれたように向けられた突拍子もない言葉に正直理解が追いつかず、聞き返してしまふ。

「行ってもいいぞ。おぬしが見せたい者のところへ。わしが許す」

そっけなくも優しい言葉に、隼人は瞳を瞬かせた。許す、とそんな言葉ひとつで行き来できるような世界ではない。それぐらいは隼人にも十分分かっていた。隼人が、隼人として存在していられるだけでも驚きで、幸せなことだと思っているのにまさか会いに行ってもいいだなんてどんな奇跡だろうか。ああ、でも。

目の前にいるこの小さな老人が“神”ならば。そんな奇跡も奇跡ではないのかもしれない。

隼人は見上げてくるキラキラした視線を受け止め微笑んだ。そして大きく息を吸って吐き出す。戸惑いを、打ち消すように。

会いにいける。きみに。

ただそれだけの想いを胸に、隼人は目を輝かせた。

「よろしくお願いします！」

「ではその前に修行じゃー。描けんことには見せられんぞー」

勢い良くお辞儀をして宣言した隼人に対し、非常に暢気な調子で語尾を延ばして言った老人のその口調に、隼人は思わずくすりと笑った。この羊のようなもこもこ老人、見た目以上にかわゆい。

「はい、頑張ります！」

若者らしい元気のない返事に、小さな老人は元々細い目をさらに細めた。

## 序（後書き）

お話の骨格は数年前から、そしてお話の全体の流れが決まったのも3月11日の震災の前でした。人の生き死にを扱う題材で、正直戸惑いもありました。でもこんなファンタジーがあってもいいのではないかと私は思います。少し長くなりますが、最後までどうぞお付き合ってください。

いない。キミが。

どこにも、どこにも。

どうして、なの？

「アキ、ご飯できたよ」

縁側に座り込み、ぼーっと庭を眺めていたアキに、長兄のハルが声をかけた。

夏真っ盛りの八月、夕方の庭には大輪の向日葵がまるで黄色い壁のように一面に咲き誇っている。さわさわと大きな緑の葉を風に揺らし、その存在を声高に主張する。

ちょうど縁側が陰になるように造られた棚に、キウイと葡萄が旺盛につるを伸ばし、その大きな葉を元気よく広げる。緑のカーテンに遮られた太陽の光は、夕方なものもあってだいぶ柔らかい。

鮮やかな水色のワンピースを纏い、ウェーブのかかった黒髪を背中に流したアキは、蝉の耳障りな鳴き声すら相殺する静かさを周囲に放ち、まるで一幅の画のようにそこに存在していた。

大学生である長男のハルは、学生の特権である夏休みをフルに利用して、今一番の心配の種であるただひとりの妹、アキにかかりつきりであった。体力を生かしたアルバイトに精を出しつつ、やらなくてはならない課題を適当に片付け、空いた時間のすべてでアキの世話を焼く。健康で体力が有り余るほどでよかつたと、今ほど感じたことはない。時間は買いたいほどに欲しいが、全ては大切な妹のため。

だが当のアキは、呼びかけられたことにさえ気付かぬ様子で、微動だにしない。呼吸しているのかすら疑わしいほど、風景に溶け込んだ無機質な姿。目線の先にあるのに、咲き誇る向日葵の鮮やかな黄色さえ映さない暗いアキの瞳に、ハルはその広い肩を落とし、小さくため息をついた。

「アキ、ご飯だよ」

今度は肩にそつと手をやって呼びかける。アキはびくりと体を震わせはつと弾かれる様に顔を上げ、ハルを見た。そして瞬時に花の様な笑顔で笑った。

「わ、ハル兄にい、びっくりした。呼んでくれれば行ったのに」

明らかに驚いたのにそれを必死で誤魔化すアキの様子に、ハルは痛々しさを感じその頭を撫でた。

「呼んだよ。大声でな。……ほら、行くよ」

「はい」

アキは元気に返事をしてすぐに立ち上がった。しかしその瞬間にふらりとよろめいた。慌ててすぐ傍にいたハルにしがみついて、バツが悪そうに微笑んで言う。

「ずっと座ってたからかなあ？ はは。……今日の夕飯なあに？」

アキの足元がふらついたのを見逃さなかったハルは咄嗟にアキの身体を支えた。最近はいつものころだったから、立ちくらみを想定していつも注意を欠かさない。ハルはやっぱり今日も、と思つて一瞬険しい表情をしたが、すぐに笑顔に戻つて言った。

「ナツ特製の天ぷらにそうめんだ。今日みたいな暑い日には最適だろ？」

その言葉にアキはにっこり微笑んだ。

「うん、そうだね。早く行こう！」

「……アキ」

「ん？ 何、ハル兄？」

自分の腕から空気のようにするりと抜け出して、ひとりで歩き出したアキの背に、ハルは思わず呼びかけた。一瞬迷つたような表情の後で、ハルは短く刈つた頭を掻いて笑った。

「いんや、何でもない。さ、飯だ飯だ！」

アキの背中に手を添えてそつと促し、家族の待つ居間に向かった。

日向家では、家事は分担制である。掃除、洗濯、食事……。全てをハル、ナツ、アキ、フユの四人兄弟と、父親である栄さかえの五人で分担して行なっている。

今日の食事当番は次男のナツで、後片付けは長男のハルの担当であつた。

次男のナツはアキと双子として生を受けた高校二年生で、地元の男子校へ通っている。今はやはり夏休み中で、時間を作っては短期アルバイトに勤しむ勤労学生だ。

家族そろつて囲んだ夕食の後で、がちがちと音を立てて皿を洗うハルの元へ、ナツは少し長めに伸ばした明るめの髪をゴムで縛りながら近づいた。

「アキは、大丈夫なのか？ 今晚もあんま食べてなかつたし……。栄養失調になつたりはしないだろうな……」

抑え目の声で心配そうにハルに向かって問うたナツは、泡だらけになつた皿を水で流すべく、水道の蛇口をひねる。ナツは普段から多くの家事をこなしている為、本来ハルの当番を手伝つたりはしない。だがわざわざ自分の隣にやってきた理由をわかっているハルは、何故手伝うのかなどとは聞かず、スポンジを動かしながらナツの質問に答えた。

「栄養は……なんとか足りている……と思う。野菜ジュースやらサブリヤらで……。だが絶対的にカロリーが足りてない。大分痩せた。

さつきも立ちくらみを起こしたみたいだ」

ざばざばと放出した水を惜しげもなく使って泡を流していくナツは、重苦しいため息をついた。顔を下げた拍子に落ちてきた前髪を邪魔そうに首を振って払う。その間も顰めた眉は額の中心で細かい縦皺を刻んでいて、不満と悲しみが同居しているような表情だった。

「もう一ヶ月だぞ……。どうしたらいいんだ？俺たち兄弟じゃ、アキの心は癒してやれないのかな……」

ナツの独り言のような問いに、ハルも答えを探しあぐねて黙っていた。

考え付く方法は何でも試した。ただアキの為、アキが再び笑ってくれるようにと願い、動き続けてきた。だがアキはその本来の笑顔も、瞳の輝きも無くしたまま、もうひと月が経ってしまっていた。

「アキのあの顔見てるとき、俺、いつそ泣いていいよって抱きしめてやりたくなるんだよな……」

うめく様に言ったナツに、ハルも同意を示した。

「ああ、そうだな……。少しでも気持ちを吐き出してくれれば……」

泡だらけのスポンジを握り締めて、それっきり沈黙してしまったハルの隣で、ナツは呟く。

「……………馬鹿やるー、隼人……………」

『本当は、お前の仕事だろう』と続けて小さく呟かれた言葉を、ハルは聞こえない振りするしかできなかった。

重苦しい空気が立ち込める、男ふたりが皿洗いをする台所の隣。障子を挟んで居間では未っ子のフユと父の栄がテレビを見ていた。ゴールデンタイムのバラエティで、画面の中ではたくさんの人が賑やかにおしゃべりしている。

大人しくテレビを見ているのかと思いきや、身体だけテレビの方向に向けて実は、遅しい長兄と細身の次兄のふたつの背中を静かに見つめていたフユは、瞬きをひとつして、音を立てずに立ち上がった。

軽快な足音で去っていく末の息子を、同じく居間にいた父、栄は無言で見送った。テーブルに肩肘をつき、フユと同じように身体はテレビの方向に向けたまま、栄はちらりと居間の隅にある仏壇に目をやって、そしてまたテレビに視線を戻した。……画面の中で笑い転げる人々を、見つめるその目は冷めている。焦点もあっていない。

音は、テレビから聞こえる意味のない響きだけ。

家族が賑やかに喋り、明るく楽しかった日向家の面影は、今は、ない。

風呂から上がったアキは、自室のベッドに腰掛け、電気もつけない。

いままの暗がり、何をすることもなく座っていた。最近はどうしてベッドに座り、いつのまにか意識が途切れて眠るのを待っている。別の場所において眠ってしまえば、家族に迷惑がかかることを学んだのだ。

ここ二週間ほど夢遊病になったかのように、変な場所で目覚めることが多く、縁側で座ったままだったり、玄関の外で意識を取り戻したこともあった。一度はすっかり水に戻った風呂の中で目覚め、朝起きてきてそこに居合わせたナツが、真っ青になって叫び、大騒ぎになってしまった。それ以来、こうしてベッドの上にいれば、いつ眠ってしまっても目覚めたときはベッドの上であり、家族に要らぬ心配を掛けなくてすむ、とアキは思っていた。体が睡眠を求めるギリギリまで目を開けていて、気がついた時には眠っていた、というのが一番楽なのだ。無理矢理寝ようとしても、睡魔は襲ってこない。

ふと、見つめられている気がして顔を上げると、ドアのところ兄弟のフユが立ってこちらを伺っていた。フユは日向家の三男で未子、今年十一歳の小学校五年生だ。ナツと同じ少し明るめの、くるくるした髪に、母親譲りのくりつとした大きな瞳。まるで天使のよくな容顔は、ご近所のおばちゃんたちのアイドルと化している。アキは少し首を傾げ、そしてフユに向かって手招きをした。

「どしたの？ フユ。入っておいで？」

その言葉に、フユはとことこと近づいてきて、アキの座るベッドの端にちょこんと腰掛けた。

「アキちゃん、ぼくね……」

フユは言い出すなりそれっきり口ごもってしまい、もじもじしている。ものすごく可愛いが、それでは一体何が言いたいのか全くわからない。フユの柔らかな髪を撫でながら、アキは先を促した。

「フユ？ どうしたの？ 何か言いたいことがあるんでしょ？ 言っつてごらん？」

「う、うん……。あのね、ぼく……。ね……。このあいだ、隼人兄ちゃんを見たんだよ。アキちゃんが座ってるえんがわのね、ひまわりの前に立ってね、アキちゃんのこと見てたの」

まだ幼い弟がもじもじと言った突拍子のない発言に、アキは目をみはる。言い難そうにしていた理由が分かった。幼くたってフユには分かっているのか。アキの顔が一気に歪む。

「……フユ。隼人兄ちゃんはもういないんだよ？ 一緒に見送ったでしょ？」

動揺して声が震えるのが分かる。フユの頭を撫でていた手も、油の切れたからくり人形のように、ぎこちなく彷徨う。だがフユはアキの動揺に気付かず、むしろ嬉しそうに話し出した。

「うん、アキちゃん言ってたよね。隼人兄ちゃんは、ママみたいに天国へ行ったんでしょ？ ママもね、時々会いに来てくれるんだよ。夢でね、会ったんだ」

フユの何の気ない言葉と無邪気さがアキに激しい衝撃と動揺を与える。胸が苦しくて、思わず「ひゅっ」と息を飲み込んだ。

……本当にそうならいい。幽霊だって夢だってなんだっていい。

もう一度会えるなら。

……だけでももう会えない。もうこんなにも純粋な子供じゃない。分かってる。……十分すぎるほど、分かっているのだ。

イライラが、言葉に棘を生やす。

「フユ、お姉ちゃんそういう冗談はキライよ。天国へ行った人には会えないの。……死んじゃった人には、二度と会えないんだよ」

自分の言葉に余計に傷ついて、胸がずきんと痛んだ。目の淵に溢れようとする涙を堪えるのに、のどが痛む。

上からポツリポツリと屋根に当たる雨の音が聞こえてきた。大粒の雨音。

いつもはやさしい姉が初めて見せる荒げた声と突き放すような態度に、フユはびくりと体を揺らし、アキから離れるように身を縮めた。

「……っ！ アキちゃん、ご、ごめんね……。ぼ、ぼく……」

弟の大きな瞳から涙が溢れるのを見て、アキははっとした。慌ててフユを慰めるも、甘やかして育ててしまったのか、末っ子の彼は昔から一度泣き出すとなかなか泣き止まない。

泣く少年と連動するかのように、降り出した雨はスコールのように一気に本降りになり、屋根を叩く。

「フユ、ごめんね、フユは悪くないよ。お姉ちゃんが悪いんだよ、ごめんね……」

子供特有の少し高めの体温を感じながら、アキはその柔らかい体を抱きしめる。ざあざあと振り続ける雨の音に紛れながらひっそく、

としゃくりあげる小さな体をさすり、ごめんねを繰り返す。

心に、穴が開いている。

こんな風に、フユを怖がらせて泣かせたことなんてなかった。それ以上に、泣いているフユを見ても、動かない心。

ブラックホールのようにぽっかりと胸に開いた穴は、深く黒い闇の中で、何もかもを噛み砕き、飲み込み、沈ませ、全ての感覚を麻痺させる。痛みだけが、チクチクと刺すような、ジクジクと滲むような痛みだけが、執拗にアキを責め立てる。まだ、生きているのだと、体の存在を声高に主張する。

隼人

動くべき脳の大半はただひとつの思念に取り付かれるように停止している。

隼人

フユの柔らかな髪を撫でつつ、くちびるは想いのこもらない「ごめんね」を呟き続ける。さきほどは堪えられたはずの涙が、ぼろりと頬を伝っていく。

隼人

どうして

死んでしまったの？

薄れていく意識の片隅に、耳障りな雨音がずっと響いていた。

雨はキライ。

君とちよならした日のことを

思い出してしまっから

アキの恋人である隼人<sup>はやと</sup>が死んだのは、大雨の降る日だった。

所用で少し遅くなった学校からの帰り道、まだ明るいつつたのに雨で視界が悪かったのが災いし、走ってきたトラックに跳ねられ、その身は宙を舞った。

道路に倒れた彼に駆け寄った通行人が、かすれる声で呟く彼の最期の言葉を確かに聞いた。

大量の出血さえ洗い流されていくような大雨のなか、彼はその場で意識を失い、二度と目覚めることはなかった。

間をおかず連絡を受けた日向家の面々は、すぐに病院に駆けつけた。そこにいたのは彼の両親と、氷のように冷たくなり、その瞼を閉じたままの隼人だった。トラックに跳ねられたものの、大きな外傷を残さなかった彼の顔は、ただそこで眠っているかのように安らかであった。

霊安室の入り口で立ち尽くしてしまつたアキを促して、横たわる隼人に近づいたハルとナツは、その死に顔に涙すら流せず、ひたすら呆然としていた。隼人の両親がすすり泣く声だけが、その場に響く音だった。普段は無邪気なフユも、そのただならぬ気配を読んだのであるう、神妙な顔をして父親の手を握っていた。

そして最悪の対面から数日、隼人とお別れの日がやってきた。黒と白で統一された空間に、一様に暗い顔をした人々が並ぶ。あ

あまりに早すぎる青年の旅立ちに、誰もがショックを隠しきれない。またその日は、何かの冗談のように、今にも雨の降り出しそうな嫌な天気であった。

法要が終わり、出棺の時となった。

霊安室での対面からショック状態のまま、食事もとらず、眠りもせず、一言も口をきかなかったアキの下へ、隼人の両親が近づいた。そして、通行人が確かに聞いたという息子の最期の一言を、アキに告げた。

>アキ、どうか幸せにく

その言葉を聞いた瞬間、アキは初めて涙を流した。まるで、凍り付いていた時間が溶けるように、みるみる零れ落ちる涙は、ようやくアキを人形から人へ戻した。と同時に、アキにこの逃れようのない現実を、決して認めたくない事実を否応なしに突きつけた。

隼人は死んだ。

そしてアキは泣き続けた。涙は枯れることを知らず、ただ、零れ続けた。

隼人が灰になって、煙突から立ち上がる煙が、空に消えていつてしまっても、ずっと。

アキ

誰かに呼ばれたような気がして、アキは眠りから覚めた。

瞼を上げると、南向きの窓の端にうつすらと光がほのめいている。夕べはフユを抱きしめたまま、眠ってしまったらしい。泣いたのをそのままにしてしまったせいで、がびがびするほおを撫でつつフユを見ると、フユは自分の腕の中で、くうくうと安らかな寝息を立てている。うっかり布団もかけずに寝てしまったが、夏だし、寒くて風邪を引くということもないだろう。

熟睡するフユを起こさないように、そっとベッドから抜け出たアキは、せっかくこんな時間に起きたのだから、朝日でも見ようと思いついた。ちょうど日の出の時刻のようだし、と立ち上がり、まずがびがびの顔を何とかしに、洗面所へと向かった。

南を向いている縁側の雨戸を開け、昨夜降った雨のせいでぬかるんだ庭を眺める。雨露に濡れた黄色の大輪の花は、昨日のような大降りの雨にもその太い茎を折ることはなかった。ゆっくりと顔を出した太陽が左手からその光を煌かせたとき、薄暗い中でも、存在を主張していた向日葵が、いっそうの輝きを増した。起きたばかりの目に、痛いくらいの黄色。朝焼けに染まる空は美しく、澄んだ空気は心地いい。

アキは朝の空気をめいっぱい肺に吸い込み、吐き出した。まだ少しかさつきの残るほおを撫でる。

緑の匂いがする、朝の清しい空気を吸い込んだら、なんだか気が楽になった。心が死んだように感じた昨夜が嘘のように、昨日のフユへの態度はあんまりだったと、素直に申し訳なく思った。

眩しいくらいに輝いている向日葵の黄色。そして大きく豊かに茂

る葉の緑。それは大好きな母の、大好きな花。毎年夏になると向日葵を見て喜ぶ母の姿を思い出し、アキは少し笑った。私にも会いに来てくれたらいいのに。そして……。

あまりに純粋な心を失わないフユが、羨ましく思えた。もし私がフユみたいに純粋に信じられたなら、私にも見えたのかもしれない。

縁側の柱に寄りかかるように手を置き、アキは向日葵に向かって話しかけた。フユが言っていたように、もし彼がそこで私を見ているなら、と。

「……ねえ、隼人。そこにいるなら私にも姿を見せてよ。ずるいよ、フユにだけ見えるなんて」

少し軽くなったはずの心が、ただひとりの人を想って感傷的に疼く。それを誤魔化すかのように小さく息を吸って吐いた。眼に痛い向日葵を見ていられずに、瞼を閉じる。零れそうになる涙を堪えて、何回か深呼吸した。泣きすぎて目の下が痛い。

ねえ、隼人、本当はわかっているんだよ。

家族のみんながずっと心配してくれていること、このままではないこと。大丈夫だと笑顔で振舞っていても、みんなには無理していることがばれていると、アキにだって分かっていた。

でもどうしたらいいの？ どこにいても何をしていても隼人を思い出してしまうのに、泣かずにはいられないのに、どうしたらいい？

目を閉じたまま、涙をこらえてじっとしているのが苦しくて、アキはいつのまにか呼吸を忘れるほど体を硬く緊張させていた。固く

む結んでいた唇を緩め、空気を大きく吸った。必死にこらえていた涙が零れないように上を向いたら、何とか零れずに済んだ。

隼人……

やり場のない、どうしようもない苦しい思いに胸を詰まらせたまま、アキは再びそっと目を開けた。少し荒い呼吸、少しだけ滲んだ視界。

新しい朝の、その差し込む朝日の中に、ふわりと舞う、羽。

突然舞い落ちてきた白い大きな羽に、アキは驚いて目を瞬いた。鳥かと思つて周囲を見回すと羽に遮られた視界の向こうに誰か人が立っているようだった。

「だれ？」

先ほどまで庭に誰もいなかったのに、と訝しげに呟いたアキは、声にならないほど掠れた呟きを零した。

「う……そ……」

大輪の向日葵の前に佇む、そのひと。体に沿ったすつきりしたラインの青い上着は膝の丈まであつて、黒いズボンに黒い布靴。ノースリーブの肩口からすらりと伸びた腕。やわらかく差し込む光を反射する茶色がかつた髪が風に揺れる。背中の中、真っ白な双翼がばさり

と、存在を主張するように大きく動いた。

「アキ」

揺れる向日葵を背に、白い翼がふわりと閉じる。

白く差し込む光の中、絵の中でしか見たことのない、その天使の姿をした人は、自分の名前を呼んだ。

「アキ」

再び呼ばれた名前に、ようやくアキは反応した。目の前に佇むその存在を、大きな瞳をさらに見開くようにして見つめる。

……失った恋人の、記憶に残るその声音。

「……アキ……？」

三度遠慮がちに囁かれた名前に、心臓がぎゅっと締め付けられる。瞳から大粒の涙がこぼれた。とても自然に、当たり前のように。震える体を抱きしめる。立っていられるのが不思議なくらいだ。

くちびるが動く。声にならずにその人の名前を形取る。

はやと

ゆっくりと自分に近づいてくる天使が、にっこりと微笑んだその瞬間、アキの意識はブラックアウトした。

それはアキが大好きな恋人の、大好きな表情だった。



「あ、アキちゃんが起きたよ」

目覚めたとき、アキが見たのは弟のフユの顔だった。

ぼんやりした頭で思う。さっき隼人の夢を見た気がする。白い翼を生やした隼人の姿に、ああ、隼人は天国で天使になったんだ、と思った。自分に向かって微笑んでくれた。

幸せな気分でゆっくりと体を起こしたアキは、自分を取り囲む家族の中の、ひとり異質な存在に目をみはった。

「あ、アキが固まった」

ナツの顔つきは面白がっているときのソレだ。

「お前だってさっき固まったろうが!」

ナツに軽くデコピンをお見舞いし、ハルが頭をぐしゃぐしゃと掻きながら言う。

「……まあ、俺も縁側でアキを抱きかかえてる天使を見たときは、さすがにびびったが」

「ハルちゃんが大声で叫んだから、ぼくびっくりして起きたんだよ! お父さんも慌てて起きたんだよね?」

アキを覗き込んでいたフユは、笑いながら父親を見た。

「早朝から騒々しすぎる……。誰のせいかってハルのせいだけだな」  
無精ひげを生やしたままの寝起き顔で、あくびをしながら栄は眠  
そうに呟く。

「あはは、ハルさんのせいっていうより、元はといえば僕のせいな  
んで。すみません、おじさん」

会話の流れにすんなりと入り込んだ天使……。もとい隼人になん  
違和感もない。更に言うなら、一切の動揺を見せずにすでに馴染ん  
でいる自分の家族に、アキは驚きを通り越して呆れた。

隼人は死んだ。間違いなく。

それは曲げようのない事実であり、認めなければならぬ現実の  
はずだ。それなのになぜ、隼人はここにいるのだ？ 背中に翼を背  
負い、まるで天使そのものになっているが、その顔も体も、声も、  
なにもかもが自分の知っている隼人なのだ。

心が、痛い。

なぜ今、こんな形で隼人が目の前にいるのか、理解できない。目  
の前の“隼人の姿をした天使”を直視できずに、アキは俯いた。  
そんなアキの様子を見て、ハルは隼人に向かって言った。

「……そろそろ、話してくれるか？ 一体どういうことなのか」

「はい、では、アキも目を覚ましたところで、説明させていただきますね」

その場に集まった五人を見回した隼人は、きちんと正座をして、にっこりと笑顔を浮かべて言った。

「アキ」

名前を呼ばれたアキは、ぴくりと肩を動かした。

「ごめんね、死んだのにこうして現れて」

その言葉にがばつと顔を上げたアキは、動揺を隠せない瞳を彷徨わせ、そして首を振った。そんなアキの様子に、隼人は少し目を細めて、口を開いた。

「僕は確かに死んでいます。みなさんが見送ってくれたあのときに」

日向家の五人は一斉に顔を曇らせた。葬式の時の悲しい想いが脳裏によみがえる。

「死んだあと、僕の魂は、天国へ向かいました。というか、僕の都合交通事故だったので、死んだとか良く分からないまま、気がついたら白くて大きな門の前にいたわけなんです」

通夜の時の暗い雰囲気を出した一瞬前の自分たちがバカみたいな、あっけらかんとした隼人の物言いに、一同は啞然とする。まるで現実味のない話の内容以上に、にこやかに話す隼人の態度は不自然なほど明るい。フユだけは話を理解できているのかいないのか、にこにこしていたが。

「その門をくぐると、そこはまあ、いわゆる天国で、死んだ人たちの魂が暮らしていました。僕は祖父母に再会しまして、しばらくは一緒に天国で暮らしました。祖父母に会ったことで、自分が死んだという事実を再確認したんですけどね。自分の葬式の様子も見ちゃいました。みんながあんまり泣くんで、それで僕ももらい泣きしちゃって」

苦笑しつつ頭を掻く隼人に、誰一人声をかけられるものはいない。呆気を取られて口を開いたままのギャラリを意に介さず、隼人は話し始めた。

天国で暮らし始めてからしばらく経った頃、隼人のもとにひとりの正天使せいてんしがやってきた。

通常、いわゆる“亡くなった人”は>天国<と呼ばれる世界に存在し、そこで暮らしている。天国とは、そこに存在する住人たちが一度その命を終えたものたちが、次の生を受けるまでその魂を癒す場所として創生の神が創った場所であり、住人たちはいずれ訪れる転生の時を“待つ”ことだけを目的とし、存在している。

よく物語に登場する、いわゆる神や天使などという存在はそこにはいない。神やら天使やらが存在するのは>天界てんがい<と呼ばれる場所で、>天国<とはまた違った世界であり、天国の住人がそれらの存在に遭遇することは滅多にない。

その滅多に会うはずのない存在が、隼人のもとへやってきた。翼を持った人型をとる“正天使”は、神の仕事を補佐する為に働いて

いるというだけあって神々しいオーラを纏い、隼人にある誘いを持ちかけた。それは 天使になる誘い、だった。

いわく、隼人のように若くして死んだものは、生きているうちに経験できなかった“仕事”を体験できるよう、“準天使”じゅんてんしとして力を与えられ、神や正天使の下で働くことができるのだという。

あれこれあってその誘いを受けた隼人は、仮初めながらも天使としての力を得、神や天使たちの住む天界へと渡り、天候を司る神の元へ配属された。隼人の直属の神様は、雲を司る通称“雲くもじい”と呼ばれる、ちいさくてよぼよぼの爺さんであった。

なにはともあれ、雲じいの下で働き始めた隼人は、他の準天使や正天使とともに、雲に関する仕事をするようになったのであった。

「雲じいってちっちゃくって可愛いんだよ。頭なんかふわふわの白髪でさ。羊みたいなの。ひげもふわふわで……」

自分の上司であるおじいちゃん神様に思考を飛ばして遠い眼をした隼人に、ナツは割って入った。

「ちよ、ちよと待て、隼人。雲じいはわかったけど、雲に関する仕事って何なの？ それと今の隼人と何か関係あるの？」

的を射た質問に、隼人は瞬きをして、またにっこり笑った。

「あ、ごめんね。つい……。えっと、雲じいと僕たちのやってる仕事って言うのは、雲を“描く”ことなんだ」

「……描く？」

「自然発生ではなくて？」

ナツとハルはそれぞれに疑問を口にした。アキと栄は黙ったまま、フユはにこにこしたままだ。

「うん、もちろん大部分は自然発生なんだけど、時々必要に応じて雲を作り出すんだよ。僕はよく知らないけど、神様会議で決めてるみたいなんだ。」

一旦言葉を区切って一同を見渡し、またしても口をぽかんと開けた三人を見遣って苦笑する。

「雲じいが雲を描いて、その雲から雨じいが雨を降らすんだ。雨を降らさない雲もあるんだけどね。それから描かれた雲は、風ばあが適当に吹き散らすって寸法なんだ」

「ちょ、ちょっと待て」

頭脳派のナツが、またも懸命にストップをかける。

「お前“描く”って言ったよな？ 絵みたいに雲を描くと、そこから雨が降るのか？ 一体どうやって？ でもって結局お前の役割は？」

眉をしかめつつ矢継ぎ早に質問したナツに、隼人はその答えを用意していた。

「これを使うんだ」

詰襟のようなチャイナ服のようなデザイン、丈の長い上着のポケットから、おもむろに取り出したのは、蓋付きの缶のようなものだった。

「> 神様の絵の具くって呼ばれてる」

その缶の蓋を開けると、絵の具とは言い難い、首を傾げたくなくなるような無色透明の液体が入っていた。

「絵筆は、僕らの指。描きたい雲を頭の中に浮かべて絵の具をつけて、それを空に走らせるだけ。そうすると雲ができて、あとは雨が降ったり風に散ったり。簡単でしょ？」

一同は、缶の中身を覗きこみ、そして一様に言葉を失った。……ちよつと理解の及ぶ範疇ではない。そんな日向家の面々を見渡し、隼人は少し嬉しそうに言った。

「僕は元々なりたての準天使だし、地上に降りてくる予定はなかったんだ。でも雲じいが、急にぎっくり腰になっちゃって。動けなくなっちゃった雲じいの仕事の穴を埋めるために、僕たち天使がそれぞれ地上に派遣されて、仕事することになったんだ。これが僕がここに来た理由。」

笑顔を更に深めてにつこりと笑った隼人は、そう言って話を締め括った。

とりあえず隼人の一連の説明を聞き、今の状況と、隼人がここに来た理由は分かった。……分かったが……、内容があまりにファン

タジーだ。

絶句したままのアキを横目に、一番早くこの状況に適応したのは、ナツだった。

「うーん、まあ、そっか。いろいろ信じがたいことも多いけど、それより俺は、お前とまた会えて嬉しいよ。元気そうだし、安心した。もう、それでいいよ」

苦笑いのため息とともに言い切ったナツに、隼人も口元をゆがめる。もともとふたりは、高校のクラスメイトで、アキと隼人が付き合いだす前からの親友だ。その辺の気安い関係がふたりにはある。

普段は現実的なことばかりを口にして、ちよつと空想癖のあるアキを窘めるナツが、いち早くこの状況を受け入れたことに、アキは内心で驚いていた。それとともに、すんなり受け入れることの出来ない自分に、戸惑っていた。

失ってからもずっと心の中に想い続けてきた人だ。奇跡のように再び逢えたのに、なぜ素直に喜べないのだろうか？

……コワイ

怖い？ 一瞬心の中をよぎった言葉に、アキは首を傾げて自分の心に問いかけた。

怖い、何が？ 死んだ人とは言え透けてる幽霊でもないし、他でもない隼人なのだ、怖いことなど何もないはずなのに。

アキが悶々としているあいだに、長兄のハルも心の整理を付けたようだ。

「まあ、小難しいことはいいや。こうして目の前にいること、それが全てだよな。隼人」

弟の親友として、その後妹の恋人として日向家にしょっちゅう出入りしていた隼人は、ハルにとつて三人目の弟のようなものだ。流石にアキと付き合いだしたときはぶん殴ってやろうと思ったが、アキの幸せそうな顔を見て踏みとどまったことは、ナツにも隼人にも筒抜けであつた。

そんなこんなで結局仲良くなつた、血のつながらない弟のような存在の隼人の肩に手を置いたハルがにこにこ笑うのを、アキは呆然とみつめる。

なんで

私は

呼吸すら忘れたかのように、目を見開いたまま固まってしまったアキに、隼人は優しく声をかけた。

「アキ」

はつと顔を上げたアキに向けられた微笑は、ひどく優しくかつた。

「無理……しなくていいからね。ごめんね、混乱させちゃつて。でもね」

一旦言葉を止め、目線を落とした隼人は、再び顔を上げ、笑みを更に深くして告げた。

「僕は、またアキに逢えてうれしいんだ。……雲じいに感謝しなくっちゃ」

それは、アキの大好きな。大好きな隼人の大好きな笑顔で。

失ってしまったって、二度と目にすることは出来ないはずの、大切な。

胸が詰まって苦しくて、声が出せそうにない。代わりに目からは涙がぼろぼろ落ちてどうにもならない。

逢いたかった逢いたかった逢いたかった。

私も、逢いたかった、隼人。

その気持ちをぶつけるように、アキは隼人に抱きついた。悶々と考え続けていた思考の塊はどこかへ投げ打って。

いつかぎゅっと抱きしめあった時のように、隼人も抱きしめ返してくれた。かすかに香る隼人の匂いに安心して更に擦り寄る。

だが隼人が苦笑して、アキの髪を撫でたとき、アキはぴくりと身を震わせた。

隼人に抱きついたアキを見たナツは、ほっとした笑いを浮かべながら大きく伸びをして、少し寝癖のついた髪を梳きながら言った。

「さーってと、落ち着いたところで、朝飯でも作りますかあ。父さん今日仕事だろ？　すぐ準備するから！」

そのナツの言葉に、栄は「ああ、そうだった」と洗面所のほうへ歩き出し、ハルも抱き合うふたりを少しだけ複雑そうな表情で見遣って肩をすくめ、フユを促してその場を去った。

こうしてひとまずその場はお開きになり、一同は散会した。

ただ、アキと隼人だけはその場から動かず、じっとしていた。自身の腕の中に納まったアキが、固く体を強張らせたのを、隼人はわかっていながらもそのまま抱きしめ続けた。愛おしそうに髪を撫で、

離れていた時間を埋めるようにしっかりと強く。

だがそんな隼人の顔に、幸せとは程遠い苦悶の表情が浮かんでいることを誰も知らなかった。腕の中のアキだけがただならぬ気配を察し、沈黙が流れるのをやり過ぎすかのようにじつと息を潜めていた。

じゅわーという音と共に、卵のいい匂いが台所に立ち込める。

よくこの短時間でと自分でも驚愕するほどに立派な朝ごはんが出来上がり、ナツは鼻歌を歌いながら居間に運ぶ。

「おーい、みんな、朝飯できたぞ〜」

と、上機嫌で呼ぶと、お腹を空かせていたのかフユが一番に跳んできた。焼き魚、茹でたウインナー、玉子焼き、温野菜に漬物……と、テーブルに並べられたおかずは、大きな瞳を輝かせる。

「わあい、ナツちゃんの玉子焼きだ！ ぼく大好き！」

そんなフユにナツは破顔して答える。

「玉子焼きくらいでそんな喜ばれるとなく。はははっ。……ところであキと隼人は？」

一転、真面目な表情に戻って尋ねたナツの疑問に答えたのは、フユではなかった。

「ああ、ナツ、相変わらず料理上手だね。おいしそう」

障子の向こうからひょいっと首を出したのは、他でもない隼人で、その後ろにあキもいた。

「隼人、お前も食うだろ？ 久々のナツ様の手料理をご堪能あれってやつだな！ たいしたもんじゃないけど。アキ、お前もそんなとこにいないで、早く座れよ」

嬉しそうなナツの言葉に、隼人は、複雑な表情で返した。

「ああ、ごめん、ナツ……。僕は食べられないんだ。せつかくだけど、残念だな」

苦笑いを顔に浮かべた隼人に、ひげを剃ったばかりのほおを撫でながらやってきたハルは不思議そうに問う。

「……？ なんでだ？ お前食わなくて動けんのか？ はっ、まさか、天使は霞を食うとか！ 仙人みたいに！」

自分で勝手に答えを探し興奮するハルを横に、隼人はひどく落ち着いた声で話す。

「うーん、ハルさん。仙人の食生活は知らないけど、天使はね、基本的に食事は摂るけど天界の食べ物しか食べられないんだ」

優しいな声音でそういった隼人に、ナツは首をかしげた。

「なんでだ？ まさか地上の食べ物汚れてて食べられないとか、そーゆー理由か？」

隼人は「ううん」と首を横に振る。

「違うよ、そうじゃない。もっと、別の理由。……触れられないんだ、天界の住人は。……地上のものには」

そして自身の手をみつめ、一瞬にして固い表情になった隼人に、  
ナツもハルも思わず真剣な表情になる。

「死んだ人や天使はね、実体を持たないんだ。……よく考えたらそうだよ。体は死んだときに焼かれちゃってるんだもの。魂って言われるものが、記憶や想いを留めて、そして天国でその意識を取り戻す……そういうことだと思うんだけど。だからね、体のない僕たちは、たとえ地上に降りてこられたとしても、触れることはできないんだ。何にも。だから食べることもだつてできない」

「だ、だけだよ……、お前、今、体あるじゃねーか。それってどーいうことだ？」

どもりながらも、もつともな疑問を口にしたハルに、隼人は端正な表情を崩さずに言った。

「ほら、僕って仕事しにきたでしょう？ だから今回は特別に、肉体を貸してもらってるんだ。……“天使の器”<sup>てんし</sup>って呼ばれてる。要するに人形みたいなものなんだ。そこに魂が一時的に融合して、その人が生きてたときの体になる。でも、あくまで器だから、本物じゃないんだ」

隼人の背後で、黙って説明を聞いていたアキは少しだけびくつと身を震わせ、先ほどから青くなっていた顔を更に蒼白にした。そんなアキに隼人は少しだけ振り向き、すまなそうに笑った。

「アキはもう気付いたよね。……僕の手、冷たいから。体だつて冷たいもんね。血が通ってないんだもの」

そうして再び自身の手を見つめた隼人は、自分を取り囲むようにして黙ってしまった日向家の四兄弟に気付き、その空気を吹き飛ばそうとするように殊更明るく言った。

「もう、みんなったら。僕が死んだ人間だつてとつくにわかってるでしょ。ほら、さつさとご飯食べなきゃ。フユくんはお腹空いてるんじゃないかった？ あ、あとそこにいるおじさんも！ 仕事遅れますよー！」

その瞬間、くるくと鳴ったお腹の音にフユは赤面し、ハルとナツは吹き出した。廊下の影からのそりと顔を出した栄は、少しバツの悪そうな顔をしつつも、食卓についた。

笑いながらナツは味噌汁を取りに台所へ引っ込み、ハルはフユを促して食卓につき、ご飯をよそうべくしゃもじを取った。

全員が何事もなかったかのように振舞う中、アキだけがやはり、その場から動けずにいた。

「アキ、ほら、ご飯だよ。ちゃんと食べなきゃね」

隼人はそんなアキに優しく声をかけ、アキの背中に腕をまわす。ふわりと微かに感じた匂いに、アキは思わず声を出した。

「……じゃあ匂いは」

驚きのかたちに目を見開いた隼人に、アキは気色ばんで続ける。

「体が、隼人のじゃないなら、じゃあどうして」

どうして、隼人の匂いがするの？ 匂いは体から発せられるもの

でしょう？

その先の言葉を口を押さえて噤んだアキは、隼人から視線を逸らし、家族に向かって必死になって言い繕った。

「ごめん、みんな。ご飯食べよっ」

そうしてそのまま食卓についたアキに集中していた視線は、ぎこちなくも逸らされ、一瞬の喧騒に乱された食卓の気配は、その場の人たちの努力によって、見た目穏やかなものへと変わっていった。

隼人はご飯を食べだしたアキを静かに見守って、自分は居間の隅に腰を下ろした。

むぐむぐとナツの作ってくれた朝ごはんを咀嚼しながら、アキは必死で自分の中の感情と闘っていた。

聞いちゃダメだ。だめ。

体が人形なのに、隼人の匂いがするはずない。きつと自分が作り出した幻覚ならぬ幻臭なんだ。だけど……。

ごくり、と甘い玉子焼きを飲み下し、アキはちらりと隼人を盗み見た。隼人はその視線に気付き、にっこり笑う。あわててご飯に視線を戻す。

……聞きたくなかった。『匂い？ 気のせいだよ』なんて。

そうしてきつと悲しそうに微笑むだろう隼人を見たくはなかった。

自分の嫌な想像で頭をいっぱいにしながら、アキは必死で箸を動

かし続けた。……久しぶりに量を食べたご飯が、ほんの少しの後に  
すべてもどされてしまうのも知らずに。

朝ごはんを素晴らしいスピードで胃に収めた父、栄は、仕事に出掛けるべく玄関の上がり框かまちに座り込み、足袋たびを履き始めた。頭にはねじったタオルを巻きつけ、耳に鉛筆を一本挟んでいる。栄の職業は大工であり、代々続く工務店の跡継ぎになる予定だ。

四十台も半ばを過ぎた年になって未だ“予定”なのは、ひとえに彼の父親、つまり四兄弟の祖父が、七十近くになってもバリバリの現役で、元気いっぱい現場を仕切っているからだ。自分が動けなくなるまで家督を譲る気はないらしい。そのことに関して栄は、父の気のすむようと考え、傍らで静かに見守る姿勢を貫いていた。栄はもとも無口で物静かな性格で、その真面目で実直な仕事ぶりを、工務店に勤めるほかの大工や職人たちも評価しており、性格の全然似ていない親子二代のかみ合わない漫才を、現場での隠れた楽しみとしている。

「じゃあ、行って来る。帰りは……六時くらいだろう」

長年愛用している、履き慣れた足袋を履いた栄は、玄関まで見送りに来たハルに声をかけた。

「わかった。ほい、これ弁当」

朝ごはんの残りやらを詰めてナツが作った弁当を渡す。夏だからご飯に梅干は必須だ。兄弟たちは祖父に連れられて現場に遊びに行くことも多かったから、建築現場が暑いことなど百も承知である。

猛暑日になるのがわかっているときなどは、弁当箱ごとクーラーボックスに入れて持たせるのだ。

息子がいつも気を使ってくれる、たっぷり量の入った弁当を受け取り、普段ほとんど動かない表情筋を少し緩ませた栄は、そういえば、とハルに尋ねた。

「アキは、大丈夫か？ 寝かせたのか？」

「ああ、うん。寝かせたよ。ここんとこあんま食べてなかったのに、急にたくさん食べ過ぎて胃が受け付けなかったんだと思う。だから多分大丈夫」

「……隼人は？」

「アキに付き添ってるよ」

「……そうか。……行って来る。後頼むな」

栄は自分に似て体格のいい長男と、声を落としてそんなやりとりを交わした後、玄関から出て行った。すぐに軽トラックのエンジン音が聞こえ、角を曲がって聞こえなくなった。

ハルは玄関先でふうとひと息を吐くと、おもむろに二階を見上げた。視線の先は、アキの部屋であったが、そこに向かうでもなく、頭をがしがしと掻きながら、風呂場に向かい掃除を始めた。

カーテンを引き、空調をかけて温度を調節した部屋で、アキは眠りについていた。ベッドの傍らの床に座り込んだ隼人は、アキの寝顔を眺めていた。

だいぶ痩せこけてしまったアキの頬を撫でる。眠れぬ夜を幾度も過ごしてきたことを隼人は知っていて、痛々しい隈と泣き腫らして慢性的に赤くなってしまった目元にそつと触れた。

自分を想って、こうまで思いつめてしまったアキに、隼人は複雑な思いだった。嬉しい反面、申し訳なくてどんな顔をしていいのかわからない。

「……出会ってから一年半、か」

そうポツリと零した隼人は、アキと出会ったその日のことを思い出していた。

一番最初の印象は、大人っぽい子だな、というものだった。

高校に入学した隼人は、クラスメートの中でひとり、少し変わった雰囲気を持つナツに興味を持った。進学校とはいえ男子校ならではのうるささの中、机に向かって黙々と本を読む姿は、ひどく大人びて見えた。隼人は知らなかったが、元々ナツは切れ長の涼やかな目もと、少し明るめのさらさらな髪で、近隣の高校生の間で噂になっているほどの美少年だった。

隼人は隼人でそのおっとりとしたやさしい雰囲気と、真面目な態度でクラスから一目置かれており、二人が周囲の喧騒から紛れ、仲良くなるのに時間はかからなかった。

いつものように話しながら歩く帰り道。下校途中の学生がバラバラと帰っていく中、ナツは前を歩くセーラー服の女の子に声を掛けた。

「アキ！ アキも今帰りか？」

その声にくるりと振り向いたのは、近くの女子高の制服を着た、おっとりとしたおやかな雰囲気の子だった。高くもなく低くもない身長、緩くウェーブした黒髪は肩口で緩く結われ、長いまつげに覆われた大きな瞳が印象的だった。

「あれ、ナツだ。珍しいね、帰りに会うなんて」

そう言うてにつこり笑ったその顔に一目惚れしたことは、ナツにすら言っていないちょっと恥ずかしい思い出だ。

「えっと……ナツ？ お知り合い？」

まさかナツの彼女じゃないかと隼人は内心びくびくしながら尋ねた。

「うん、双子の妹のアキ。おっちょこちよいがトレードマークだぞ」

笑顔全開で言われた『妹』という言葉にほっとしながら、目の前の美少女を見つめた。そう言われてみると鼻筋や全体的な顔の感じがナツに似ているが……おっちょこちよい？

「アキ、こっちは俺の友達、隼人だ」

「あ、僕、よしかわはやち吉川隼人です。よろしく」

紹介されてそっけない自己紹介をした。高校一年の春なんて、自己紹介ラツシュだ。もう反射反応とっていい。

「はじめまして、兄がお世話になってます。日向アキひなたです。よろしくお願いします」

にっこりと丁寧な挨拶に、慌ててお辞儀をした。もう勝手に恋に落ちてしまっていて、かわいかわいとか叫ぶ心臓を上から手で押さえる。

どきまぎする隼人をそのままに、自己紹介完了とばかりに、「それじゃ三人で帰るか」と、マイペースなナツが歩き出した。アキも当たり前のように方向転換して歩き出す、その一步を踏み出したときだった。

「きゃあ!」

という悲鳴に、隼人はとっさに手を伸ばす。何故か何もなかった。ろでバランスを崩したアキの腰を隼人が引き寄せ、転倒は免れた。一瞬の出来事、中途半端に密着した体制のまま固まったふたりに、ナツは呆れた声音で頭をガシガシ掻いて言った。

「……おつちよこちよい発動。隼人、サンキューな」

「あの……、ありがとうございます。恥ずかしいです、会ったばかりなのに」

真っ赤に染まったアキの顔を見て、隼人は慌ててアキを解放する。落ちているアキの鞆を拾い、持たせてやる。

「うっん、気にしないで。よかった、転ばなくて」

隼人はにっこりと余裕の笑顔を浮かべつつ、何食わぬ顔で三人一緒に家路についた。だが隼人の頭の中は、一目惚れした恋心に戸惑う気持ちと、先ほどアキに触れた時の柔らかい感触とが緋い交ぜになり、その日どうやって家まで辿り着いたのか、全く覚えていなかった。

いつの間にかアキの大きな黒い瞳が、隼人の顔を見つめていた。一瞬トリップしていた頭を振って、隼人は平静を装って呼びかける。

「アキ？ 起きたの？ 気分はどう？」

アキはその赤みの引いた唇をゆっくり開いた。

「……初めてあったときの夢、見てた……」

その言葉に隼人は目を瞬かせる。

「わたし、あの時、隼人を好きになったの……。笑顔が、素敵で……」

言いながらも目線を彷徨わせた瞳は、瞼の裏に隠れ、薄く開かれたままの唇は寝息を立て始めた。どうやらまだ夢の中にいたようだ。

隼人はふつと笑って再びアキの頬を撫でた。隼人の妄想が飛び火したのか、はたまたアキの夢を共有したのか……。どちらにせよ、同じタイピングで同じことを考えるなんて、滅多にないことだ。絆の深さだろうか、などと考えて、隼人は直後に頭を振った。

目を閉じてふーと息を吐いた隼人は、何かを断ち切るかのように頭を振って素早く立ち上がり、そしてアキの部屋を後にした。

とんとんと階段を下りてくる足音に、ナツは大量の洗濯物を入れた洗濯籠を抱えて顔を上げた。

「おう、隼人。アキはどうだ？」

「うん、よく寝てるよ。顔色はだいぶ良くなったし、もう少し休めば大丈夫だと思う」

「そっか」

ほっとした表情で息を吐いたナツに、隼人は少し意地悪な様子で言う。

「ナツ……相変わらずのシスコンだね……。でもアキの夢に出てきたのは僕みたいだったから。残念だね」

輝かしいほどの笑顔で挑発的な言葉を投げられたナツは、眉を寄せた嫌そうな表情を隠さない。

「隼人……言いたいことはそれだけか？洗濯干すの手伝え」

当たり前のように自分を使おうとするナツに、隼人は反論せずに苦笑して従う。

この家の洗濯物はナツが取り仕切っている。なんでもハルに干さ

せるとシャツやらズボンやらが皺くちやになつてしまい、アキもあんまり几帳面な性格ではないことから、後からいろいろ面倒くさいよりは、最初から全部自分でやってしまおうということらしい。今は夏休みだから理解できるが、学校がある時でも毎日ひとりで洗濯するのだから徹底している。

そんなナツだが、隼人が休日遊びに来ると必ず洗濯の手伝いをさせた。しかも隼人が来る日に限ってシーツなどの大物や、普段は洗わない様々なものを洗う。確信犯だと隼人もわかつていたが、几帳面なナツの御眼鏡になつたのだと文句も言わずに手伝うことにしていた。

変わらないテンポのナツとのやりとりに、隼人はくすりと笑つてナツの後に続いた。

日向家の庭は、田舎だけあつて広い。今は五人家族が住まう家屋も、実は広すぎて掃除が大変なのだが、家族全員そんなことは口に出不さない。何しろこの家は、栄の父である四兄弟の祖父が、彼ら一家のために自ら設計図を引いて建てた家だからである。長年大工をやつてきた祖父のこだわりで、外観は純日本建築、玄関は南向き。家の中も洋間より和室のほうが多く、もし不動産の広告に載つていても敬遠されるタイプだろうと思われる。だが、広く取られた台所や居間の畳の下に隠された掘りごたつ、大きく開いた縁側とそれに向かつて広がる庭は、暮らす人の心地よさを考えた、祖父なりの心遣いだと家族は知っているし、頑丈に作られたこの家が大好きだ。

庭は庭で、園芸好きな祖母が様々な木や花を植えたお陰で、一年中花や実がなるようになってい。圧巻なのは縁側の上に張り出すように造られた、藤棚ならぬキウイ棚で、鉄パイプで組まれた骨組みに、キウイフルーツの雌雄二本の木が絡み合うように伸びている。秋になれば熟した大量の実を収穫できるが、今は独特の丸い大きな

葉が、太陽を浴びて更に成長せんと頑張っているお陰で、縁側はほどよく日光の遮られた快適な空間になっている。数年前に祖父が冗談半分で隣に植えた葡萄の木も、いまでは大きく成長してしまつて、葡萄の葉もキウイの葉を押しよける勢いで勢力を広げている。

縁側から向かつて正面には一面の向日葵が黄色い元気な花を、左手にはサルスベリの大木が、赤い花をいっぱい咲かせている。裏庭には柿の木、梅の木、グミの木、クランベリー、プラムなどが植わっており（何故みんな食べられる木なのかと、以前隼人はナツに聞いてみたが、ナツは笑つて「さあね」と答えるだけだつた）、とにかく木と花に囲まれた、小さな植物園のような庭なのだ。

さて、そんな緑に囲まれた庭に出てきたナツと隼人の二人は、向日葵の前に直角にくの字を描くようにしつらえられた物干し竿に、洗濯物を干していく。

五人分の洗濯物は普段からでも多いのに、夏は汗をかく分、余計に増えるから嫌になる。ただ強烈な日差しのおかげで、午後になるとからりと乾いていてくれるのは嬉しいと言うナツに、「それは主婦の感想だよ」と隼人は本音を漏らして、ナツに睨まれた。

他愛もないことを言い合いながら洗濯物を干していたが、ふと途切れた会話の間でナツは、隣で黙々と手を動かしている隼人に目を遣つた。

「隼人。お前、いつまでここに居られるんだ？」

目を瞬かせてナツを見た隼人は、とたんに嫌そうな、苦い顔をして薄く笑つた。

「ナツは直球で核心ついてくるから、嫌だよね」

さっきまでとは全く別方向に振られた話題は、ナツが本当に聞きたかったことに違いない。さすが県内屈指の進学校で、学年でもトップクラスの頭脳だ。頭が回る。

隼人がここにいること。それがかなりのイレギュラーであること。

隼人の説明がどんなにファンタジックで信じられないことでも、ここに存在している以上、その上で大切なことを、ナツは見切っている。

「そうだね、大体……一週間くらいかな」

吐息に乗せるように小さく囁いた隼人を、ナツはじっと見つめる。

「雲じいのぎっくり腰が治るまで、だから、長くてもその位だろうね。天界の時間はこっちの時間よりだいぶゆっくり流れるけど、それでも……」

「そか。わかった。お前、ウチに泊まるんだろ？ 布団用意してやるからさ」

ただ夏休みに泊りにきた友達に言うような台詞をナツは言って、洗濯干しを再開した。

それ以上、何も言わず何も聞かないナツに、隼人は相好を崩してぼつりと呟く。

「やっぱり、ナツはいいよね」

自分にはもつたないくらいいい友達だと、隼人は素直な気持ちで言う。そんな隼人にナツはふいとそっぽを向いて顔を隠した。

「ふん、ナツ様だからな！」

表情は見えないが、耳が赤くなっているのを隼人は見逃さなかった。これだからナツはいい。可愛いと言ったら怒るから言わないけれども。

東から射す午前の太陽は、仲良く洗濯物を干す青年達を焦がすように勢いづく。それぞれの胸に秘めた想いをそのままに、時間はじつとりと過ぎていった。

洗濯物を干し終えた二人は、家の中に戻った。日差しに当てられ、少しひりつく頬を撫でながら、ナツが台所へ向かうと、風呂掃除と一階の部屋掃除を済ませたハルが、居間で新聞を広げて茶を飲んでいた。

「ハル兄、今日はバイトないの？」

ナツが台所から声をかける。二つのコップと麦茶の入ったポットを持って居間にきて、そしてはっと立ち止まる。

「あ、麦茶も飲めないんだっけ」

自分を見てちょっと気まずそうにしたナツに、隼人はその行動の

中のナツの自然な優しさに微笑む。

「うーん、飲んで排泄できなくなっても困るしね」

「飲んでもいいけどその後どうなるんだろう？」 と、お腹をさすりながらさらりと言った隼人に、ハルが飲んでいた麦茶を嘔き出した。

「ちょ、隼人！ おま、そんなこと言うなよ！」

口からだらりと雫を垂らした情けない表情のハルに、隼人もナツも笑った。笑われたハルは、口元を拭きつつ元凶を作ったふたりを睨み付けた。

「ちくしょー。……今日は休みだ。お前は、ナツ？」

「あはは、ハル兄サイコー。……えつと俺は午後から。じゃあ今日の夕飯お願いね。俺は要らないからさ」

立ったままとぼとぼと麦茶をコップに注いで、ナツはすぐに飲み干した。そして二杯目を注ぎながら台所へ引き返す。冷蔵庫に麦茶をしまい、再び戻ってきたナツは、ハルの隣に腰を下ろして言った。

「ハル兄、今日はアキも食べられるようになったみたいだし、カレーとかでいいかもね。ああ、でもスパイスが胃に良くないかなあ？」

「そうだなあ、どつちかって言うとカレーよりグラタンとかの方が優しい感じしないか？ アキの好物だし」

「ハル兄グラタンなんて作れるの？ 今日はハル兄が作るんだよ？」

「つてか夏にグラタンって」

「あ、そっか、そうだったな。んじゃ、他にアキの好きなもので…」

くすくすと笑い声が聞こえてハルとナツはそちらを向いた。言わずもがな隼人が、本日の夕飯に関する兄弟討論を見て笑っているのだった。

「ホントにアキ好きだよな、ふたりつて。微笑ましいってこういうことだよな、きつと」

その言葉に仲良し兄弟は、ちよつとばつが悪そうに顔を見合わせ、そして一瞬の後開き直った。

「ま、否定はしないな。何しろアキは超絶可愛いからな！ 自慢の妹だ！！」

「正直アキ以上に可愛い女の子に会ったことないもんね、俺。けど身内の鼻屑目じゃないんだからシヨウガナイよね」

真顔で言い切った妹バカふたりに、隼人はさらに声を上げて笑う。苦しそうに大笑いする隼人に、ハルはやはり真顔で言った。

「そんなアキ大好きな俺たちだけだな。お前だって人のこと言えないだろ」

ふいに真剣に投げられた言葉に隼人は笑うのをやめた。ハルの顔をじっと見つめる。

「……死んでから天使になって、恋人のところへ来た奴の話なんて聞いたことないよ」

それが自分に対するハルなりの贅辞だと、隼人は受け取った。

「はは、そうだね。……ありがとう、ハルさん」

曇りのない笑顔とともに言われた「ありがとう」に、ハルもナツも苦笑した。最愛の妹の心を奪った男であるのに、憎めないのは自分たちの性格か、隼人の人柄か。

アキを見てくる、と二階へ上がっていった隼人を見送ったふたりはどちらからともなくため息をついた。

「あいつの葬式で泣いたのが嘘みたいだな」

複雑な表情で新聞をたたんだハルに、ナツがやはり複雑な表情で言った。

「……一週間くらいだって、ハル兄。あいつ、どうするつもりなのかな……？」

和やかな空気の中で忘れそうになるが、隼人が死んだことはどうしようもない事実であって、覆すことはできない。飲んだり食べたりできないことを除いて、生きているのと変わらない隼人の姿は、錯覚を起こさせる。それがアキの心にどんな影響を及ぼすのかと、ナツは心配していた。

アキの恋人である以前に、隼人は自分の親友である。自分の考えうる最悪の結果になってしまったら、絶対ぶん殴ってやる、と心に決めて、ナツは微妙にぬるくなった麦茶を飲み干した。

「一週間……か」

ハルが呟いて、居間は重い沈黙に支配された。そこに日向家本来の天使がばたばたと走って来た。

「ハルちゃん、ばく宿題終わったよー」

いままで部屋に籠っておとなしく宿題をやっていたフユが、終わって嬉しそうに一階に下りてきたのだ。手にはプールバッグを持っている。

「今日学校のプールの日だから、僕行ってくるねー」

「おー、隣の晶子と一緒にか？ 気を付けて行くんだぞ」

小学校五年生なのに自分でスケジュール管理ができるのはすごいと兄ふたりは感心し、エンジェルスマイルを浮かべた愛らしい弟を送り出す。

玄関で揃って手を振って、弟の小柄な後姿を見送ると、長兄と次兄はまた揃ってため息をついた。

「しつかり育ててくれたのは助かるけど、やっぱりちょっと気の毒っていうか……」

「うん、あんまりしつかりされると逆に。気丈さに、泣けてくるって感じだな……」

ふたりは自然と仏壇を眺めていた。今まで日常、特に意識することもなく過ごしていたが、隼人が現れたことで、無意識のうちに気

にかかったようだ。写真の中、色褪せることのない、笑顔。

「母さん亡くなって、もう七年か」

「七年……か。時間ってというのは、容赦ないよな」

ハルは大好きな向日葵に囲まれて笑う、美しい母親の写真を見つめ、そして呟く。

「母さん、天国にいるのかな」

ナツは無言で、何かを考えているようだ。

仏壇に置かれた母親の遺影は、静かに兄弟を見つめる。ハルはそのまま、母親と過ごした幼い日々の記憶に、欠方ぶりに思いを馳せ、目をつぶった。

太陽もそろそろ地平線の端に沈もうかという頃。

眠りの淵から眼を覚ましたアキは、ぼんやりと部屋を見渡した。隙間の開いたカーテンから零れる光は、夕方のそれで、薄暗くなった部屋に大きなため息をついた。

また、倒れたのか。

何故だかすつきりしている頭にアキは首を傾げた。が、よく寝たからだ、とすぐに思った。我ながら現金だ。天使の姿で現れた隼人をずっと否定していたのに、その存在に安心して眠ってしまうなんて。

アキはベッドに体を起こした状態で膝を抱え、唇を噛んだ。苦しみ続けた一ヶ月、辛くて、食事ものを通らずに、眠れなくて、ただ泣いていた日々が、彼が舞い降りたその日のうちに一転した。…やっぱり隼人が好きなのだ。

直後、布団に包まれたままの膝に、アキは頭をぶつけて目を瞑った。ちつとも痛くないし自虐的になったわけでもない。ただ、あまりに冷静に自己分析する自分に嫌気がさしたのだ。

“隼人が好き”、そんなことはずっとわかっていた。そうでなければこの一ヶ月、何のために泣き暮らしたと言うのだろうか。好きで好きで、でもその気持ちはどこにもぶつけられなくて、消せなくてもしかしたら全て夢なんじゃないかと、この馬鹿げた日常は明日になったら全部夢で、彼は笑顔で私の元へ戻ってきてくれるんじゃないかと。否定しては願って、自分の感情と思考に絡めとられて身動

きができなくなつて。

だけど何故？

あんなに望んでいた隼人は、今自分の前に現れた。一目見て気を失つてしまうほどに嬉しかった反面、理性のどこかで全てを否定する自分がいる。

彼はもう、死んだ。

どんなに願つても、何を犠牲にしたとしても、もう戻らない。誰かが死ぬとはそういうことだと、知っているではないか。そんな彼が戻つてきた、それは

がらりと窓ガラスの開く音がして、そちらを見ると、ベランダに続く窓から隼人が入ってきた。

「あ、アキ、起きたの？ 具合はどう？」

今朝、朝日に輝いていた真っ白な二枚の翼が隼人の背中で揺れていた。アキはその美しさに、悶々と思考の渦にいたことも忘れ、そういう話しているときとかご飯食べているときはなかったのになあと、ふと疑問に思った。

「ん？ ああ、翼はね、使わないときはしまっておけるんだ。便利だよ。どんな風になつてるのかは僕も知らないんだけど」

アキの目線で言いたいことを理解した隼人は、そう言いながらばさりと翼を震わせてたたんだ。次の瞬間、消えたように見えなくな

った。

「……どこかに、行っていたの？」

しまつておいた羽を広げて行くところは、きっと空を飛んで行かなければならないところなのだろうと、アキは思った。アキの手の届かない、どこか。

その問いに隼人は優しく微笑んで、人差し指を上に向けた。

「うん、屋根に」

風が頬を掠めていく心地よさに、アキは声を上げた。

「わあ、気持ちいい！」

夏の夕方、じりじりしていた太陽もその暑さを潜め、少しだけ涼しい風が吹く。遮るもののない屋根の上で、風は踊るようにアキの周りを吹き抜けた。

しまつたばかりの翼をもう一度出して、隼人とアキは屋根の上のぼった。隼人に抱えられて空を飛んだアキであるが、ほとんど一瞬だったために声を出す暇すらなかった。

屋根の上に腰掛けたアキは、しばしオレンジ色に染まる空と、家々のその向こうに広がる田んぼと川原の緑を気持ちよさそうに眺めていたが、横からじっと見つめてくる視線に気づいてぱっと顔を背

けた。

せつかく隼人と一緒にいるのに、思わず景色に夢中になってしまった。そんなアキを見て隼人はふっと笑って、そして言った。

「僕の仕事、見せてあげる」

そうして懐から件の缶を取り出した。

「あ、>神様の絵の具<」

「うん」

空に雲を描くための絵の具。どんな風にするんだろう、とアキは期待して身を乗り出した。

「こつやってね」

そう言っつて隼人はおもむろに絵の具に指を突っ込んだ。透明な水のように見えたその液体は、意外なほどの粘性を持って隼人の指に纏わり付く。隼人はそのまま空に指をかざし、すつと左から横に薙いだ。

オレンジ色の遠くの空に、ふわり。

それまでなかった白い雲が、薄く溶けるように滲み出した。

「わあ……」

それだけを声に出し、アキは手で口を押さえて、雲に見入った。

隼人はそんなアキを横目に小さく微笑み、さらに絵の具に指を入れ、次の雲を描く。

「今度は犬でも描いてみよっか？」

その言葉に、いたずらっ子のように瞳を輝かせたアキに、隼人は満足そうに笑う。

まるで魔法のようにしなやかに動く指先から、少し茶色みを帯びた、耳の垂れた犬の横顔が空に映し出された。

「空がオレンジだから、あんまり違和感ないでしょ？」

そういつてくすりと笑う隼人に、アキは破顔で答えた。

くま、うさぎ、アイスクリーム……と、隼人の指は次々に可愛らしい雲を描き出す。元々絵を描くのが好きだった隼人は、なかなか上手な絵を描く。次のリクエストを尋ねてきた隼人に、アキは少し考えてから「串にささったお団子」と言った。隼人は笑いながらお団子の雲を浮かび上がらせる。お団子はアキの大好物で、よくふたりに分け合って食べた、思い出の品だ。

「アキ」

隼人が唐突にアキに呼びかけた。

「……時が来たら、僕は天界に帰る」

アキの口元だけが笑みの形のまま凍りついた。ふたりの間を、夕方の生ぬるい風が吹きぬける。

「勝手に来て勝手に帰るだなんて、ごめんね。……ごめんね」

帰る。

その言葉にアキの胸は張り裂けるように痛んだ。

ああ

「いつ……？ いつまでいられるの……？」

隼人の顔から目を逸らせないまま、アキの口は勝手に、聞きたくて聞きたくないことを尋ねる。ただ、胸の痛みを堪えるのに必死だった。

「長くて……一週間くらいだと思っ

申し訳なさそうに呟かれた返事に、アキは負けそうになる。

一週間。

あと一週間の後で、また隼人はいなくなる。自分の前から、消える。

ああ

何か言わなければ、とアキは思った。

風の音だけが沈黙を破る。太陽はみるみる沈んでいき、オレンジは紫に変化していく。泣きたくなくなるほど美しい絶妙なグラデーションの中、先ほど隼人が描き出した雲が、形をゆっくりと変えながら流れていく。

ああ、そうか。

私が天使の隼人を受け入れられなかったのは。

……二度目のさよならを、怖れていたから。

アキの瞳からとうとう流れ出した涙に、最後の光が反射した。

「隼人」

搾り出すような小さな呼び声に、隼人は答えた。

「……何？」

「もう……さよならしたくない」

アキは隼人のほうを見ずに言った。隼人はそんなアキをじっと見つめて言った。

「アキがそれを……望むなら」

何か大切なものを、心の奥深くに沈めたような気がした。何か、忘れてはいけない大切なものを、自分の手で泥の底に沈めたようなこのまま、どこまでも、落ちていったらいいと、アキの心のどこかで誰かが呟くのが聞こえた。

急に強風が吹きつけ、隼人は無言でアキを抱き寄せた。アキも何も言わず、その腕に寄り添う。

下からふたりを探すハルの声が響いてくる。夕飯の時間になったのに、見当たらないふたりを心配する声だ。

擦れるような風の音に便乗して、聞こえない振りをした。黙って抱き合っただまま返事すらしなかった。

ただ、お互いが惜しくて、この時間が惜しくて、離れたくない。

希望と絶望の境界線の上で、ふたりは何かを必死に繋ぎとめるように、抱きしめる腕に力を込めた。

いつの間にか輝き始めていた星々と黄金の月に、アキがようやく時間経過を知ったとき、隼人はアキを抱えたまま、よっと立ち上がった。

「じゃ、下に降りようか。ハルさんが心配してる。おじさんも帰ってきてるよ」

うん、とアキが返事をする前に、温度はなくとも柔らかい腕でアキを抱きしめたまま、隼人は屋根の上から庭に飛び降りた。心の準備もなしのいきなりのダイブに、アキはパクパクと口を開け、抗議の目で隼人を睨み付けた。

「なっ、何で直接飛び降りるのっ!？」

必死に呼吸を整え、ゼーはーしながらそれだけ口にしたアキに、隼人は思わず噴出しながら、縁側にアキを下ろした。

「はは、いや、ちょっとやってみたくって。ごめんごめん」

ぷーとふくれたままのアキを見て、苦笑しながら隼人は足の裏に少しいた土を払う。昼間の強烈な太陽の下でカラカラに乾いた土では、そんなに汚れていない。

アキはそんな隼人を横目でじとつと見つめ、

「ぞうきん持ってくる」

と、走って行ってしまった。

隼人が仕方なく縁側に腰掛けると、廊下の薄暗がりから、栄がぬつと顔を出した。

「アキは、大丈夫か？」

娘を心配して低く響く声に、隼人は柔らかく微笑む。

「はい、大丈夫です。すみません、日も落ちちゃったのに、屋根の上なんかについて」

「……お前は、大丈夫なのか、隼人」

アキに向けられたのと全く同じ響きで自分に向けられた言葉に、隼人は驚いて一瞬返事が遅れた。

「！ はい、大丈夫です」

その返答に満足したのか、栄は口元を綻ばせて隼人の後ろを通過した。通り過ぎるときに、隼人の頭にぽんと手を置いて。

「……あのっ！」

一瞬触れた暖かさに、隼人は思わず声を掛けた。振り返り首をか  
しげて、栄は言葉の続きを待った。

「おばさん……いや、葵さん、元気ですよ」

小さく囁かれた言葉に、栄は目を大きく開けて固まってしまった。  
普段表情の変化に乏しい栄には、珍しい表情と言える。その顔を見  
つめたまま、隼人は更に続けた。

「……おじさんに、伝えてくれって。……『しょうがない人ね』っ  
て」

隼人を凝視したまま、栄は口を開きかけた。が、廊下を走ってく  
るアキの足音を聞き、出かけた言葉は、のどの奥に飲み込まれてし  
まった。

「あれ？ お父さん、何してるの？」

雑巾を片手に戻ってきたアキは、そこに不自然に立ったままの父  
親に声を掛けた。栄は少しだけ息を吐いて、踵を返した。

「いや、なんでもない」

そのまま立ち去ってしまった栄に、アキは首を傾げて、その場に  
いた隼人に疑問をぶつける。

「何だったの？ お父さん」

「……ううん、特に、何も」

隼人はにっこり笑って答えた。アキから雑巾を受け取り、足の裏を拭く。やはり大して汚れていないようだ。

「ただ、心配してくれたただだよ。僕たちのこと」

そう言っつて隼人は縁側の上に立ち上がり、アキを見下ろした。明かりの灯されていない薄暗い縁側では、隼人の表情は見えにくい。栄と隼人が何かの話をしたのは確実だ。ただ、隼人に言うつもりがないことはわかったし、それになんたか隼人が嬉しそうにしているような感じがして、アキはそれ以上、何も聞かないことにした。

その後、相当心配したのだろう、憔悴した表情を隠さないハルに、アキと隼人は正座させられ説教を受け、バイトから帰ってきてそれを目撃したナツに大爆笑された。フユは、ハルが半泣きでふたりを探し回っている間、ハルに指示された通りに先に大人しくご飯を食べ、お風呂に入って早々に寝てしまった。このマイペースぶりは栄に似たのであろう、当の栄も、説教をするハルたちを横目に、黙々とひとり食事をとり、そのまま自室に引き上げてしまった。

くどくどと同じことを繰り返し話し続けるハルの前、殊勝な面持ちで正座したアキの手を、隣で正座する隼人が握った。膝の上に置かれたまま、優しくも強い力を感じさせる手。アキの視線を隼人が受け止めた。

それは共犯者の約束。

それは悲しくむなししい約束。

寂しさと恋しさに囚われた、ふたりの愚かさが形になったもの。

長い一日が、終わる。

朝日もまだ顔を出さない、早朝。隼人はまた、屋根の上上がった。  
ていた。

本来、雲じいの仕事を代行する為にやってきた隼人には、こなさなければならぬ仕事があった。一週間分与えられたノルマ。これさえやっておけば、後は自由にしていいと、雲じいは耳打ちしてくれた。

雲を描く、こんな仕事があることに、隼人も最初は驚いた。子供のお絵かきみたいなものかと思っていたが、仕事に就いてからその大変さを理解した。実際、雲じいはいとも簡単に雲を描く。神様会議で決められた通り、雨じいや風ばあの要望に沿ってそれらしい形になるように描かなければならない。隼人も天界での修行中、繰り返し繰り返し雲を描き続けた。しかし案外難しいことに、周りに元々ある雲と似せなければ不自然になってしまうし、かといって描くのに失敗して雨が降らないような雲を描いても仕方がない。

筋がいい、とみんな褒めてくれたが、どんな仕事でも、やっぱり難しいんだなあ、とアルバイトの経験もない隼人は感心し、雲じいや他の先輩天使の仕事ぶりを尊敬した。

懐から件の絵の具の缶を取り出し、指にとる。いつみても不思議だ。もうだいたい慣れたが、蜂蜜のようできてべたべたせず、高級な絹のような感触でいて指に吸い付く絵の具。無色透明だからこそ、気合を入れて集中して描かなければ、思う通りの色は出ない。

夜明け前の空。透き通るような黒。細く弓のような下限の月。かすめるような群青色の雲の群れが、遠くを流れていく。煌めく星々に被せるように、隼人は指を滑らせた。

するりと伸びていく、薄い青。夜の雲は色を出すのが難しい。闇に紛れるように、トーンを暗く押さえなければならぬからだ。

隼人はひとつ息をついて、次の雲を描く。次は、雨雲に成長させる種雲だ。これが一番難しく、実はまだ、満足のいく雲が描けたことがなかった。

静かに気合を入れて、とん、と空を押すように点を打った。

「あ、描けた」

ぼつりと漏らすように呟く。成功か失敗かはすぐに分かる。これは、成功だ。

隼人は思わず会心の笑みをこぼした。

遠くに浮かぶ星のような一点。この小さな小さな塊が、風に流され、水蒸気を吸収し、大きくなって雨を降らす。

「……不思議なものだよなあ」

知らないこと、驚くようなことがたくさんあった。当たり前のように存在している世界は、様々な営みが重なり合ってその形を作っている。自分達の理解の及ばない、途方もない力が、何らかの意思を持って世界を動かしている。

「僕もそっちの仲間、なんだよな」

隼人は自分の手を見つめた。皺のない、人形のような手。血の通わない、冷たい手。感覚はある。生きていたときと変わらない、触れる感触。

なんだか疲れた気がして、隼人はため息をついて屋根に寝転がった。

本当はため息をつくことさえ、自分でそう感じているだけであそ  
らく息はしていない。鼓動もなく、脈拍もない身体が、呼吸を必要  
とするのだろうか？

寝転がったまま、右手を空に透かすように、顔の前にかざした。  
つい昨日まで、空が透けて見えた自分の手。飾りのようなきれいな  
爪が、弱い弱い月の光を反射して光り、白い手が闇の中にぼんやり  
と浮かび上がる。

本当は、絵の具のためではなく、必要だった身体。  
実体がなければ、触れられないひと。

アキ

ないはずの心臓が、とくと音を立てたような気がして、隼人は  
身を起こした。

左の胸を押さえて確認する。……何の音もしない。

「……冗談じゃないよ、早すぎるだろ」

浮かぶのは、焦り。

隼人は胸をドン、と叩いて、これ以上苦しませないでくれ、と願  
った。……誰にでもなく、願った。

だいぶ日が高くなり、蝉が鳴き始めた。耳に心地いいとはいえない蝉の声に、アキは重い瞼を上げた。しばらくはそのままでは一っとしていたが、はっ、と気がついたように、ベッドから跳ね起きる。パジャマのままで一階へ駆け下り、ぼさぼさの髪を振り乱し、居間の障子を開けた。

「あ、アキ、おはよう」

隼人は朝食の準備を手伝い、皿を食卓に運んでいるところだった。爽やかな笑顔で挨拶をされ、アキはその場にへなへたと座り込んだ。

「……お、おはよう」

隼人が、いる。夢ではなく、現実に。

思わず大きなため息をついたアキに、隼人が近くに寄ってきた。

「アキ？ 大丈夫？ 気分でも悪い？」

心配そうに覗き込んでくる隼人に、アキは慌てて首を振った。

「ううん、大丈夫。何でもないの」

そう言って立ち上がり、照れくさそうに笑うアキを、隼人はそのやさしい空気で包み込んでくれるようだった。

「おーい、隼人、こっちも持っててくれるか？」

台所からハルの声が響く。

「はい」と返事をした隼人は、アキの髪を撫でて言った。

「アキ、頭ぐちゃぐちゃだよ。ご飯だから、着替えて顔洗っておい  
だよ、ね」

まるで小さい子供の面倒をみるようだったが、どんな言葉でもアキは心底嬉しかった。うん、と元気よく頷くと、洗面所へ向かって走っていく。

隼人が、いる

それだけのことが、アキをこの上なく上機嫌にしていた。洗面所の鏡を見れば、隼人に言われたとおり、どう寝たらこんなになるのかというほど、髪はぼさぼさになっていて、アキは慌てて櫛を手にとった。こんなところを隼人に見られてしまうなんて。

ばたばたと走り回って、ようやく見られてもいいくらいに身なりを整えたアキは、今度は障子の隙間から、居間を覗き込んだ。

もうすっかり朝食の仕度も済んで、手持ち無沙汰になったのか、隼人は柱に寄りかかり、テレビを見ている。なんでもない日常的な姿に、アキは胸が震えるように感じて、首を振った。

「おい、アキ、何してるんだ？」

目の前で不審な行動を繰り返すアキに、ナツが後ろから声を掛ける。これは元気になった、と解釈してもいいのだろうか？ と眉を顰めていると、アキが小さな声で呟いた。

「隼人がずっといてくれたら、毎日楽しいのに」

言葉の真意を測りかね、ナツは眉間にしわを寄せて無言でアキの肩を叩いた。

「わ、ナツ！ いるんなら声掛けてよね！ びっくりした」

胸を押さえて、ほおを上気させて笑うアキに、ナツはさらに眉を顰めたが、何事もなかったように振舞った。

「おう、悪い。さっさと入れよ、アキ。後がつかえてるだろ？」

そういつて振り向いたナツの後ろには、いつのまにかフユが眠そうに目を擦りながら立っていた。

「おはよう、ナツちゃん、アキちゃん」

「おはよう、フユ」

アキとナツは揃って声を掛けると、三人一緒に居間に入っていた。テレビを見ていた隼人は、三人に気づくと立ち上がった。

「おはよう、ナツ。フユくん」

にっこり笑った隼人に、フユが走り寄っていつて抱きついた。

「隼人兄ちゃん、おはよう！」

ころん、と自分の懷に飛び込んできたフユを、隼人は難なく抱きとめた。ただ、体温のない自分の身体では、フユが冷えてしまうだ

ろつと、離れた方がいいと言つと、フユが逆に隼人に擦り寄るよう  
にして言った。

「ううん、暑いから、隼人兄ちゃんは一ひんやりしてて気持ちいいよ  
」

暢気な子供の発想に、みんなが笑つた。隼人も苦笑してフユのふ  
わふわな髪を撫でた。

「お、みんな起きてきたな。後は父さんだけか」

台所からハルが長身を折り曲げるようによきつと顔を出した。

「父さんなら洗面所にいたからもつ来るよ」

ナツはそう言いながら台所に入っていく。コトコトと弱火にかか  
っている鍋のふたを開け、傍に置いてある味噌を適量溶かし込む。

「今日は豆腐とわかめしか入れてないぞ、だしは出てるだろ？」

ハルが再び台所へ戻り、ナツの隣に立つた。ナツは味噌汁の味見  
をして頷く。

「うん、これでオツケー。ハル兄、そろそろ味噌の分量覚えたら？」

料理が苦手なハルは、これまでの練習の成果で、ある程度の簡単  
な料理を作れるようにはなつたが、味噌汁に入れる味噌の量が未だ  
に判断できず、しょっちゅう入れすぎては栄に怒られていた。そこ  
で仕方なく、味噌を入れる前まで自分で作り、最後の仕上げはナツ

に頼むことにしているのだ。これじゃいつまでたっても進歩しないよ？ とナツは言うのだが、何故かどうしても上手くならない。弟の視線を苦笑いで誤魔化し、味噌汁を運ぼうと持ち上げる。

「ハル兄」

「ん？ 何だ？」

不意に呼び止められ、鍋を持ったまま振り向く。ナツは自分から呼び止めておいて、下を向き何か考え込んでいるようだ。

「……いや、やっぱ何でもない。ごめん、ハル兄」

「……？」

顔に疑問符を貼り付けたハルに、フラフラと手を振って、ナツは背中を向けてしまった。変だなとは思いつつ、ハルは重い鍋を置く為に、そのまま居間へ移動した。

台所にひとり残ったナツは、腕を組んで思案顔のまま立ち尽くしていた。

……アキが、おかしい。

「あいつちゃんとわかってる……よな？」

二卵性であっても、同じ日に生まれずと一緒成長してきた双子である。ナツはアキの変化を敏感に感じ取っていた。

嫌な予感が当たらなければいい。

ナツはそう願い、髪をがしがしとかきながら、家族の待つ居間へ向かった。

## 9 (前書き)

年明けですね。物語も中盤に差し掛かってきました。のろのろペー  
スではありますが、もう少しお付き合いください。

「それで今日は、どうする予定なんだ？」

朝食の席で口をもぐもぐさせながらハルが問う。目線の先は、アキだ。

「どづつて……どづしよづつ？」

問われたアキは、さらに質問を隼人に回した。

食卓には着かず、少し離れたところでぼんやりテレビのニュースを眺めていた隼人は、話題を振られて考える様子を見せ、またアキに質問を戻した。

「そうだね……アキはどうしたいの？」

「えっと……、天気もいいし、どこかへ出かけたい……かな」

箸を持ったまま、アキはもじもじと言った。せつかく隼人がいるのだ。デートくらいしてもいいじゃないか、と。

しかしその答えに、隼人は困ったように笑った。

「外へ行くなら、僕は一緒にいけないな……残念」

「は？ 何だよ」

玉子焼きを摘んだハルが、口に放り込みながら聞く。ナツも視線

だけ隼人に向けた。

「えっと……どう説明したらいいかな。簡単に言つとね、この家の周りには結界が張つてあるんだ。僕が問題なく存在できるように」

分かるような分からない説明に、アキは額にしわを寄せて首を傾げた。

「死んだ人間は生き返ることはない。これはこの世界の絶対のルールだ。僕は厳密には生き返つた人間ではないけど、ここに存在するべきではない魂だ。……わかる？」

隼人は全員を見渡して確認する。みんな黙つて頷いた。栄はひとり黙々とご飯をかき込みながらテレビを見ていたが。

「それを無理なくこの場に居られるようにしているのが今張つてある結界で、そこから出ると、僕はこうしてのんきに存在できなくなる。存在を保つのがとても難しくなるんだ。力が要る。だから僕はこの家を離れられない」

隼人の固い説明に、全員が黙り込んでしまったため、食卓は重い空気に支配された。箸を持つ事さえ躊躇われるような静けさの中、会話するきつかけすら失つてしまった。

そこにずずー、気の抜けた音を立てて、栄が味噌汁を啜つた。そして固まってしまった子供達を見渡し、ことん、とお椀を置いて一言呟いた。

「……家にいればいい」

渋い低音の音が響き、つつかえていた空気が流れ出す。ハルは大げさな素振りをしながら、いつのまにか落としてしまった箸を拾う。

「うん、そうだそうだ、外はめっちゃくちや暑いぞ、家にいれればいい。そうだ、庭で水遊びなんかしたらどうだ？ な、フユ、やりたいだろ？」

「うん、ぼくやりたい」

きゃらきゃらと笑いながらはしゃぐフユと、安堵の表情のハルを見て、隼人はがっくりと肩を落とした。

「ご、ごめんなさい……何か……。僕、もうしゃべらない方がいいかも」

先ほどの重い空気を作り出したのは自分だと、鈍くはない隼人は謝った。仕方のないことだが、隼人が「死んでいる」ことを強調してしまう話題では、雰囲気盛り下がる。説明も自分が話すとしても硬くなってしまう気があり、隼人は落ち込んだ。

「だ、大丈夫だよ、隼人。ね、今日はみんなで水遊びしよ！」

デートに行けないのは残念だが、一緒にいられるならどこだって構わないと、アキは笑った。

「うん……ごめんね」

再度隼人が申し訳なさそうに言うと、ご飯を食べ終わり、食器を持って立ち上がったナツが、通りすがりに隼人の背中をバーンと叩いた。

唸ってうつぶせに倒れた隼人が『何するんだ』という顔で振り向くと、そこには凶悪な笑顔を浮かべたナツ様が降臨していた。

「……水着は貸してやる」

それは暗に、食卓の空気を重くした罰として、水浸しにするぞ、という意思を含んだ笑顔だった。

水しぶきに陽の光が乱反射する。

庭のキウイ棚の下に出した丸いビニールプールで、フユとアキが水着姿で戯れていた。ハルは上半身裸になって、ホースで水をかける役だ。

日向家の庭は高めの生垣で囲まれていて、さらに大きなサルスベリと一面の向日葵が、外からの視線を遮っている。可愛い妹と弟が変な輩に狙われる心配もなく、またキウイ棚が容赦ない直射日光から肌を守ってくれるため、ハルも安心して水遊びを推奨したのだ。

ナツと隼人は遊びに加わずに、縁側でスイカを切りながら、きやあきやあと弾ける笑い声を聞いていた。

ナツはスイカの切れ端を口に放り込みながら、ざくざくと切り分けていく。

切り終わる頃には、おいしい部分はなくなってしまうんじゃないかと隼人は思ったが、逆らえば水浸しの刑になるので、黙ってそれを見ていた。

適当な大きさに切り分けたスイカを、ナツが隼人の持つているお盆の上に置いていく。

「そっぴゃ、天国にスイカはあるのか？」

素朴な疑問だ。大体ものを食べているのかすら分からない。

「あるよ。世界中のどんな食べ物も、食べたいと思ったら出てくるよ」

隼人は食べたそうにスイカを見つめて言う。

「出てくる？」

「うん、料理好きな人は自分で料理もするけど、そうでない人はね、ただ自分が食べたいなって思えば、なんだって食卓上がるのさ」

隼人は何でもないことのように言うが、ナツとしてはとても意外な話だ。

「天国って便利なのかな。じゃあ例えばフランス料理のフルコースが食べたいって思ったら、それが出てくるのか？」

「うん、そうだね。ちゃんと想像できたら、の話だけど」

「は？ まさかアレか、全部自分の想像の産物ってヤツか？ じゃあ食べたことないもんだつたら結局食べられないんじゃないか」

ナツは切ったスイカを盆に載せて、水遊びに夢中になっている三人の元へ持って行ってまた戻る。あの輪の中に加わるつもりはない。

スイカの汁でべたべたになった手を、濡れ布巾で拭きながらナツは微妙な顔をした。

隼人はそんなナツを見て笑う。

「はは、正解。要するにね、天国に住んでる人って体がないじゃない？ 食べる必要が最初からないんだよ。食べ物は何も食べてるつもり、飲み物は飲んでるつもり、で、精神的に満足できたらそれでいい、って仕組みになってる。本当は天国に住んでる人たちはそのことに気づいてない。自分には体があるって思っているんだ。おいしいものいっぱい食べられて幸せだなんて。僕は天使になったから、それを知っているだけ。僕も最初天国に住んでたときは、何て便利なんだろうって思ったけど」

当時のことを思い出したのか、隼人は苦々しく笑った。隼人は思いつく。祖父母と暮らしていたあの頃。娘よりも早く天国に来てしまった孫を、可哀想に可哀想に、と毎日パーティーのように盛大にもてなしてくれた。毎日こんなに料理を作るのは大変だろうから、もういいよと、数日してから言っていると、「あら、作っているわけじゃないから大丈夫なのよ」と何事もないかのように言われ、きよとんとした。

天国で暮らすと、それまでの生活観が一変する。

物は売っていない。欲しいものは願いさえすればすぐに手に入るから。お金も必要がない。買う必要がないから。服も、食べ物も、高級な化粧品も。車や家、広大な土地。望めば何だつて手に入る。ただし、細部まで思い描くことができるもの限り。

「空想の中で、生きてるようなものなんだ。それに気づいてしまえ

ば、ひどく虚しい。だから気が付かないように、そついつふつにあの世界はできている」

あつという間にスイカを食べ終え、再び元気いっぱい遊び出した三人の姿を、羨ましそうに見つめる隼人の目は、さらにどこか遠いところを見ているような気が、ナツにはした。確かに、この自分の親友は、遠い世界へ行ってしまった。

「お前は、虚しいと思ったのか？」

ナツの茶色の瞳のその奥が、水底に揺らめく宝石のように光って、隼人は少しだけ微笑んだ。

生きている人間が、擦り切れるように生きるこの世界。死んだ人間が、夢の中を生きるあの世界。虚しい世界は、どちらか。

「……そのことに気づいたときは、ちょっと虚しいって思ったよ。でもその世界に生きる人にとっては、全部本物なんだ。だから本当は、虚しいとか、そうじゃないとか、誰にとってもどうだっていいんだ」

どこで生きていたって、どう生きていたって、願うことはひとつだ、と隼人は笑った。何か大切なものを見つめるような、慈しむような柔らかい笑顔で。

「大切な人が、幸せに暮らしてくれたら、それでいい。できれば自分も、一緒に幸せに暮らせたら、それが一番嬉しいと思うけど」

二つの世界を知る隼人。その一番の願いが、叶えられないまま宙ぶらりんに揺れている。誰にだって叶えてやれない。たとえ神様だって叶えられない。

緑色の葉の下で、顔にかかる陰も緑色だ。風に揺れて擦れる葉の音に、蝉の合唱が重なる。

ここに、いるというのに。  
すぐ傍に、いるというのに。

ナツはどうしようもないやるせなさに、両手で顔を覆って後ろ向きに倒れこんだ。

「ナツ？」

不審そうな隼人の声が聞こえた。

『死』というものの本質は、案外こういうものかもしれない、そうナツはぼんやり思った。

指の隙間からこちらを覗き込む親友の顔が見えた。知り合って、友達になって、一年とちょっと。水の中を泳ぐように、適当に世の中を渡ってきた自分に対し、真面目一辺倒で誠実にやってきた隼人。実際どこに共感を覚えて意気投合したのかすら不明だ。

何で死んだんだよ

そう言いたくてナツは口をつぐんだ。誰も責められない。ただ、隼人はもう戻らないと、それだけが分かっていることだから。大きく息を吸って吐き出した後、ナツはよっ、と勢いをつけて体を起こした。

「大丈夫か？ 暑いのか？」

心配そうに覗き込んでくる隼人の顔を見て、ナツは思わず笑って

しまった。何がおかしいのか、と不思議がる隼人の顔を見てさらに笑う。

……真面目すぎるからダメなんだよ

長所でもあり欠点でもある。しょっちゅうそう言っただけでいいのだが、持って生まれた性格なのだろう、死んだって直っていい隼人はナツのことをもつたいたないくらいいい友達だとよく言うてくれた。しかしナツに言わせれば隼人こそナツにとっての“もつたいたないくらいいい友達”であった。母親を早くに亡くし、寡黙な父と不器用な兄と共に家を、家族を守らなければならなくなったナツにとって、同年代の少年達は幼すぎてうるさかった。ピリピリした雰囲気を出していたこともあって自然とひとりになってしまっても、ナツには静かでちょうどいいとしか思えなかった。そんなナツの隣に、隼人はいつの間にかそつと、まるで最初からずっと隣にいたかのように寄り添っていた。凹凸のようにぴったりとはまる会話にナツの心がどれだけ癒されたかを隼人は知らないだろう。ナツがどんなに不貞腐れた、いじけた発言をしても、真面目に考え応えてくれる隼人の素直さがどんなに救いになってくれていたかも。

「馬鹿は死んでも直らないって言うけど、真面目すぎなものも直んないもんか」

ぼそつと聞こえないように呟いた言葉は、やはり隼人には聞こえていないようだった。ナツは心に浮かんだ感傷を吐き出すようにふつと笑った。

「ほら、スイカ食べる、熱中症かもしれない」

真面目な顔でスイカを差し出してくる隼人に従い、ナツはくすくす笑いながらすっかりぬるくなったスイカを頬張った。泣きそうに

なっていることなど微塵も表に出さずに。

俺だって、好きだったんだよ、隼人。お前のそういうところが。もちろん、アキとは違う感情だったけど。

強い強い日差しの下、揺れる緑に遮られた日陰に踊る水しぶきと歓声。そこに加わる蝉の大合唱。

ナツはスイカを齧りながらも、心配そうな顔で見つめてくる隼人に、『心配するな』と笑顔を見せた。これが、隼人と過ごす最後の夏だと、本当の最後なのだと、スイカと一緒に腹の底に飲み込んだ。

死んで欲しくなんて、なかったよ、隼人。

スイカを持っていない左手が無意識に虚空を彷徨い、隼人の腕に触れた。夏の暑い日差しと気温の中で、触れた瞬間は暖かく感じたが、中から伝わってきたのは冷たさだった。確かに触れているというのに、この上なく不確かな存在をぎゅっと捕まえるかのように、ナツは無言で隼人の腕を掴んだ。つかまれた隼人は何を思ったか、ナツの頭に手を載せて、髪をそつと撫でてきた。

まるで聞き分けのない子供を撫でるような優しい感触に、ナツは照れくさくなって頭を豪快に振ってその手を落とした。

「……………何すんだよ」

「最初に腕掴んできたのはナツだろ？」

唇を尖らせて照れを隠すように言ったナツに対し、隼人は明るく笑いながら再びナツの頭に手を伸ばした。

「だからやめろって！」

「ははっ」

キラキラと輝くようなナツと隼人の笑い声が辺りに響いて、ハルとアキ、そしてフユはビニールプールの中で顔を見合わせた。そしてお互いにつこりと笑い合い、いつのまにかくすぐり合いに発展して子供のようにはしゃぐ二人を、キウイ棚の下から静かに微笑ましく見守った。

かつて過ごした日常が、再び戻ってきたような、そんな幸せを絵に描いたような一瞬だった。

「そういえばさ」

ずっと気になっていたんだけど、ひとしきり騒いで疲れたナツが額の汗を拭いながら口を開いた。髪の毛はぐちゃぐちゃになり、汗だくになりながらもなんだかすっきりした表情だ。

「何？」

隼人は髪を少し乱した程度で、ひとり涼しい顔をしてナツに振り返る。

「お前、家には行かなくていいのか？ いや、ここから出られないとは言ってたけど、さすがに親には会っておいた方がいいんじゃないか？」

「家にいるのは全く構わないが」と付け加えながら髪を手櫛で整えるナツに、隼人は一瞬固まったように動きを止めたが、何事もなかったかのように手をひらひらさせた。

「いや、いいんだ、あの人たちは。息子の幽霊が出たって、大騒ぎになっちゃうよ」

笑って言うその言葉が、ぎこちなさにぶれているのに、ナツは気づいていた。だから何か言おうとして開いた口をすぐに閉じた。両手を固く握り締め、それでも顔だけはにこにこ笑う隼人に、それ以上は追求することができなかつたから。

「……なあ、隼人」

蝉の声が一瞬途切れた。

「……何？」

首を傾げた隼人に、ナツは単刀直入に聞く。聞けない質問の代わりに問う。もうひとつ聞きたかつた事。

「お前、まだ何か隠してるだろ」

隼人が貼り付けるように浮かべていた微笑がさっと消えた。驚きに見開かれた瞳を、ナツの真剣な表情が食い入るように見つめた。一瞬で場に鋭い緊張感が満ちた。

「……うん」

小さく、零れるように隼人の口から落ちた肯定の言葉。戸惑いと驚きが緋い交ぜになったような表情で、隼人はそれ以上を口にしなかった。

しばらくの間、緊迫した状態のまま見つめあっていたが、ふいにナツがため息をついて顔を背けた。

「…………お前らよく似てるよ、双子の俺よりずっとな」

ナツは吐息にのせて囁くようにそう言うと、先ほど整えたはずの自分の髪をぐしゃぐしゃにかき乱した。隼人はそんなナツを見つめたまま立ち尽くしていた。

「ナツ…………」

「あんまり勘がいいのも、どうかと思うよ…………ナツ」

言葉と共に、ぼすつ、と隼人の腹に軽いパンチを入れ、ナツはスイカの皮を回収し、家の中へ入っていった。

残された隼人は、痛みはしないがお腹を擦り、首を緩く振ってため息をついた。

「あんまり勘がいいのも、どうかと思うよ…………ナツ」

目の前のプールでは、はしゃぎすぎて疲れた様子のハルに、水をかけていたずらするアキとフユが笑っている。その向こうで一面に咲いた向日葵が、風もないのにざわりと揺れた。こちらを向く花の中心が、ちょうど自分を監視する目のように見える。ただそこに咲いているだけの、無害な花であるというのに。

「…………わかってますよ、葵さん」

隼人の眩きは、再び鳴き始めた蝉の声にかき消された。

隼人が日向家に現れて四日。それまでの静けさが嘘のように、日向家は活気付いた。それはやはり、一家のムードメーカーであるアキが元気になったことが一番の原因だろう。

本来アキが多く請け負っていた料理を再開し、家族は久しぶりのアキの味に舌鼓を打った。アキはあまり几帳面ではないが、アキが一番母親から料理を教わっていて、いわばおふくろの味の継承者であり、意外にも料理は上手い。ナツが料理上手なのは単に器用だからで、アキが料理をしないときはナツが適当に作るのだ。

隼人は食べられないながらも、楽しそうに料理を作るアキの姿をにこにこして眺め、みんなが食卓を囲むのを微笑ましく見守っていた。

その日の夕食が終わって、それぞれが自由な時間を過ごしている頃。隼人は何気なく縁側に座って、外を眺めていた。サワサワと風に揺れる向日葵。薄暗闇の中に浮かび上がる大輪の花をぼんやり見つめていると、ふいに後ろから声を掛けられた。

「アキは、どうした？」

一番風呂を浴びて、すっかりくつろいだ雰囲気の中であった。浴衣を着流し、飄々とした様子である。

「お風呂に入ってますよ」

にこつと笑って隼人は答えた。ほぼ一日中べったりしているが、さすがに風呂まで一緒に入っては、アキ馬鹿たちになんと罵られるか。確実に無言の圧力を掛けてくるであろう、アキ馬鹿その一である父親の栄を前に、隼人は思考を笑顔に隠した。

しかし不意に真剣な表情になって、囁くように言った。

「……そろそろ、来る頃かなあって、思っていましたよ」

栄はその滅多に感情を表さない顔を翳らせて、遠くを見つめた。視線の先には、庭の向日葵。

「……ああ」

そうして隼人の隣に腰掛け、男ふたりは一旦沈黙した。月明かりの下、ただ黙って庭を見つめる栄は思いつめたような表情で、しかし隼人は逆に口元に笑みを浮かべた、穏やかな顔をしていた。何をすることもなく、言うでもないふたりの間には、それでも優しい空気が流れていた。まるで、そのときを静かに待っているかのように。

「……アレは、元気だって言うが、その……」

口を開いた栄が、再び口を閉ざしてしまふ。その姿に苦笑して、隼人は栄が聞きたかったことを汲み取って答えた。

「はい、元気にしてますよ、葵さん。……おばさんって呼ぶと怒るんですよね」

思い出したように苦々しく笑いながら、隼人は一瞬途切らせた言葉を、静かに続けた。ずっと話したかった言葉を、栄に伝える為に。

「……天国に着いた時、祖父母と一緒に僕を迎えてくれたんです。『来るのが早すぎよ』って怒られました」

気がついたとき、隼人は真っ白な門の前に立っていた。

門、といっても扉はなく、ちょうど神社の鳥居のように、くぐる穴が開いているだけのものだ。しかし上は見上げるのに首が痛くなるほど高く、それを支える左右の柱は四角く、柱というよりは建物のようにそこに建っていた。石造りの重厚なその門は、表面を繊細でかつ大胆な彫刻に覆われ、そのデザインは歴史の教科書にあった昔のヨーロッパの彫刻を思い起こさせた。

こんな大きな門、造るのにすっごく時間がかかるだろうなあ、などどつい暢気なことを考えてしまったのだが、ふと前を見ると、門の向こう側に子供の頃に亡くなった祖父母の姿が見えた。泣きながら手を振る、懐かしい姿に、ああ、もしかしてとその答えが頭をよぎる。

ほとんど無意識のうちに、一步、二歩と踏み出して、その門をくぐり終えたとき、とても大きな力で締め付けられるような気配とともに、隼人は自分の死を知った。

思わず立ち止まって門を振り返る。が、そこに今さっきくぐってきたはずの重厚な門は影も形もなくなっていて、真っ白な空間が広がっているだけだった。

ああ、もう戻ることはできないんだな、と頭で理解する。

行く場所も分からず、とにかく前へ進む。祖父母が必死に呼んでいたから。だんだん近づいていく祖父母の姿は、幼い頃見送った姿よりも幾分若い気がした。けれどもやっぱり皺くちやな顔にもつと皺を寄せてふたりは泣いていた。

「隼人……」

名前を呼ばれ、抱き寄せられ、隼人はぼんやりと考える。

ああ、僕はやっぱり、死んじゃったんだな

「何でこんな早く」と、手を握り締めながら泣く祖母と、もみくちゃに抱きしめてくる祖父。

頭では理解していても心が追いついていない。わんわん泣く祖父母を逆に慰めるように、隼人はその曲がった背中を撫でる。

ふと、前を見ると、その場にもう一人の人物がいた。おかしいな、父方の祖父母はまだ健在だったはずだし……と隼人は思い、顔を上げてよく見てみる。

今にも泣きそうな顔で立つ若い女性。どこかで見たことがある、と隼人は思った。

「あ……えっと、おばさん……?」

記憶を探ると、その答えはすぐに出た。毎日のように出入りしていた日向家。その仏壇に飾られた写真の中に、このひとは笑っていた。

日向家の四兄妹の母。栄の妻。日向葵。

ひなたあおい

隼人が呟くと、そのひとはその写真と同じ笑顔でにっこりと笑った。そしてその笑顔を顔に貼りつけたまま、無言で拳骨を飛ばして

きた。祖父母を抱えて辛うじてよけた隼人は、突然の展開に目を白黒させる。

葵はちよつと残念そうに、当たらなかつた拳をぶらぶらさせて言った。

「今度おばさんって言ったら、本気でぶつ飛ばすわよー！ 葵さんって呼べって言ったじゃない！」

プンスカ、という形容がぴったりくるほど、子供っぽくむくれる姿は、とても四十近くで亡くなった人とは思えない。歳はどうにせよ、隼人にとっては恋人のお母さんなのであるから、初対面ではおばさんと呼ぶしかなかったのだが。

おっかなびっくりしながらも、隼人は口を開いた。

「い、いや、僕、おば……葵さんとは初めてお会いするんですが……写真ですか」

「あら、そう言われてみればそうかも。ふふ。わたしったら勘違い！ じゃあ改めましてよろしく。アキたちの母です」

コロコロと表情を変え、今度は満面の笑みで手を差し出した葵に、隼人は少し警戒しながらその手を握り返した。

「初めまして、吉川隼人です。アキさん……いや、日向家の皆さんにはお世話になって……」

社交辞令のようだったが、初めて会う彼女の母親に、隼人は緊張し何を言ったらいいか分からなかった。

「うん、こちらこそ！ でももう死んじゃったからお世話できない

わね！」

あっけらかんと言いつつ放った葵に、隼人はもちろん、はらはらと成り行きを見守っていた祖父母も沈黙した。祖父母ももちろん初対面であつたし、葵が誰なのかすらいまひとつわかっていない。だがもう少し言い方があるだろうと、三人でじとりとした視線を向けてみるものの、自由な雰囲気そのひとは、そちらを気にすることも見ることもなく、口元だけは笑みの形を保ったまま目を閉じた。

「来るのが早すぎよ、もう」

瞬間、零れ落ちた涙が、本当の葵の人となりを物語っていた。

ああ、アキはこの人の不器用なところに似たんだろう

隼人はそう思った。よく見てみれば、本当に似ている。アキの目は、お母さんの目だ。くるっとした髪の毛のくせも。

「僕も、そう思います」

目の前で涙を流すそのひとは、残してきてしまった恋人の面影が確かにあつた。

子供の恋、だったのかもしれないけど、本当に大切に、大切にしてきた、最愛の人を。

……残してきて、しまったんだ。

自分の死を理解しながらも泣く暇もなかった隼人の目から、ようやく一粒の涙が落ちた。

「ちょっと、あつけなさ過ぎますよね、こんな終わり方。……さよならもできなかつた」

それでも静かに、冷静にしか涙を流せない隼人を、葵は抱きしめた。

「……本当にもう、何してるのよう。ほんとにつ……」

そして声を上げて泣き出す葵に、隼人はどこか気持ちが悪く落ち着くような思いがした。

葵の声があきの声と似ていたせいもあったろう。何の遠慮も配慮もなく、ただ感情のままに泣く葵につられるように、とうとう隼人も声を上げて泣き出した。それを見て、それまで葵に対し微妙なわだかまりを抱えていた祖父母でさえも泣き出し、ひとしきり四人でわんわん泣いた。

ただ真っ白な空間に、泣く人の声だけが響き、どこかへ吸収されるように消えていく。

自分がこれからどうなるのか、どこへ行くのか、まったく未知なる不安の中、隼人は温かさに包まれて泣き続けた。

ぼんやりとしている間に場所が移動し、はっきりと目を覚ましたときにはベッドの中だった。

部屋に見覚えはなかつたが、温かい空気に包まれた空間に、隼人は思考を巡らす。

僕は、死んだんじゃないか？

そう思いつつも、身を起こすとそれは見慣れた自分の身体、手に触れるのは布団の感触。存在している、僕。

何もかもが夢だったのか、と飛び起きて、部屋を後にする。いきなり飛び出してきた隼人に驚く祖父母の姿も目に入らず、外へ飛び出した。

まぶしい光に目を顰め、慣れた頃にあたりを見渡すと、そこは期待したとおりの住み慣れた住宅街でもなんでもない、ただ果てなく広がる平原だった。

「あれ、引越したっけ？」

ぼつりと零れた言葉は、自分でも間抜けだと思った。

力を失くしてその場にへたり込み、どこまでも続く野原を見つめた。

花のおいが漂う明るい場所。地平線の先には青い空。何も変わらない、生きていたときに見ていたのと同じ空なのに。

ふっ、と顔に影ができた。目だけ動かして確認すると、そこには葵が立っていた。

陰になっているのに、その黒い瞳は自ら光を放つかのように、煌めいて見えた。

「あなたは、死んだのよ」

厳かに響くその声が、ふわりと吹いてきた風に乗って流れていく。殴られるよりも、大声を出されるよりも、心にずっしりと響いた。

「……はい」

隼人は理解していたはずの死を、ようやく受け入れた。

その後葵は、祖父母と暮らす隼人のところへしょっちゅう遊びに来ては、お茶を飲んだりおしゃべりをしたりするようになった。不安定だった隼人を心配したのか、それとも単に暇だったのか。真意は分からなかったが、いつも明るく元気な葵の姿が、隼人の心をゆつくりと上向きにしていた。

「……時々、思い出したように僕に聞くんです。フユは大きくなっただ？ とか、ハルは相変わらずによきによき育ってるのかしら？ とか」

隼人は苦笑して言うのに、栄は無表情を貫き黙っている。いつの間にか持ち出してきた酒をちびちびと舐めながら、ただ黙っているのみだ。隼人のために用意してくれたお猪口には酒が注がれてはいるが、やはり飲むことはできない。なんだか仏壇に供えられた形だけの酒みたいだなあと思いながら、隼人は慣れない匂いだけで酔った気分になる。

「……天国には“窓”って呼ばれる場所があつて、そこから生きる人の世界を見ることができるとですよ。そのひとが見たい人の姿を映してくれるんです。僕もよく“窓”へ見に行きました。アキの

こと」

隼人は飲めない酒を手に取り、手の中で転がすように揺する。その小さな水面には、白い月の光が、おぼろげに反射して揺らいた。

「葵さんも自分で見に行つて知っていたのかもしれません。でも、葵さんは僕に聞くんです。知ってることを、わざわざ確認したいみたい。話してあげると葵さんは、いつもすごく優しい顔でありがとうつて言っんです。……本当に、喜ぶんですよ」

とぼとぼと酒を注ぐ音だけが響いて、栄はやはり何も言わない。元来無口な性格ではあるが、こつも話さない栄を見るのは、隼人も初めてであった。隼人は仕方なく目の前の向日葵に目を遣つて話し続ける。

「不思議な人ですよ。葵さん。僕がこうしてここに来ることも、葵さんには反対されたんですよ。結局行くと決まった後も、『何か伝言はありますか？』って聞いても、『ないわ』って怒るんです」

隼人はその時のことを思い出すように笑った。

「……でも、葵さん、僕がここへ来る直前に、わざわざ僕のところに来て言っただんです。『しょうがない人ね』って、おじさんに伝えてくれ、って」

不貞腐れたような照れたような表情でそうひと言口にした葵を思い出し、できるだけ真摯な思いでその言葉が伝わるようにと、隼人は静かに言っただ。そしてくるりと首を回して栄を見るも、栄は変わらず下を向いたまま、目線は地面に固定されている。

隼人はしばらくの間黙っていたが、沈黙の重さに堪り兼ねて小さ

く訊ねた。

「……おじさん何かしたんですか？」

素敵な夫婦であり家族であることは隼人には分かってはいるし、別に夫婦の間の詳しいことが知りたいわけではない。『しょうがない人』という短いメッセージの意味を自分が知る必要なんてない。伝えることが隼人に託された仕事だ。ただ何故栄が何もいわないのかが気になった。

普段から無口な人ではあるが、もしかしたら、亡くなった奥さんが天国で元気にしてるだなんて話、無神経だったたるうかと隼人がおろおろしだした頃。

「……それだけ、か？」

ようやく重い口を開いた栄は、低く呟いた。小さすぎる低音を、隼人は聞き逃した。

「え？ 何ですか？」

目をぱちくりさせて聞き返す隼人に、栄は渋い顔をしてもう一度言った。

「葵は、それだけしか言わなかったのか、と聞いたんだ」

ぶいっつと顔を背けて言ったその栄の様子は、誰がどうみても照れ隠しそのものだった。自分の話が栄を嫌な気分にしたわけではないと分かった隼人は、赤くなった耳を微笑ましいと思いつつ、申し訳なさそうに笑った。

「すみません、これだけ、です」

それを聞くと、栄はお猪口に残った酒をくいつと飲み干し、立ち上がった。

「……………そうか」

そのまますたすと歩き出してしまった栄の背中に、隼人は慌てて声を掛けた。

「あ、あのっ……………！ そのときの葵さんっ！」

廊下の途中で歩みを止めた栄は、背中を向けたままで隼人の言葉を待っているようだった。隼人は慌てて立ち上がって、その浴衣の似合う広い背中に告げた。

「……………すごく照れてました。はにかんでたつて言うか……………。僕は葵さんが生きていた頃のことには知りません。それでもこの家で、葵さんがどれだけ大切にされているかは知っています。家に最初に来たとき、写真に挨拶しろって四人みんなに言われたんですから！」

勢い込んで大声を出したため、息が切れて、隼人は急いで深呼吸をした。

「僕は知ってます。おじさんがずっと葵さんのことを想っていることも、葵さんがずっと、ずーっとおじさんのことを想っていることも」

ぴくりと、栄の肩が動き、栄は半身をこちらに向け、何か言いた

そうに口を開いた。だが隼人はそのまま言葉を続けた。

「だって葵さん、僕に一度も聞かなかったんです、おじさんのことは。ハルさんやナツ、アキ、フユ君のことは何度も何度も聞くのに、おじさんのことは一度も話題に出さなかった。しかも僕からおじさんのことを話すと、葵さん逃げるんです」

栄の瞳が訝しげに顰められた。妻は自分が好きだという内容の話ではなかったか、とその瞳は言っている。職人の持つ独特の鋭い眼光に捉えられた隼人は、少し怯みながらも、拳を握って気持ちを奮い立たせた。……葵に頼まれたわけじゃない。だけど、伝えなくては。そう、思つて。

「僕も最初は疑問でした。だけど気づいたんです。葵さんは、本当はおじさんの話を一番聞きたかった。何より気になつてた。聞いても聞いても足りないくらい。でも聞いてしまったら際限がなくなるから、もう二度と会えないのに、会いたくなるから……。大好きな気持ちばかりが大きくなってしまつから……。だから聞きたくても聞けなかつたんです」

栄はあまり大きくない瞳を精一杯見開いて、隼人の必死な顔を凝視していた。それに気づかないまま、隼人の勢いは止まらない。

「きつと、“窓”にも近づかなかったんだと思います。だって“窓”からは見えてしまうから、おじさんの姿。……でも、みんなに会える僕が頼まれた伝言は、ひとつだけです！ おじさんへの伝言だけだったんですよ！ それって……、葵さんの気持ちそのものだと思いますか！」

最後にはぜーはーと肩で息をしながら言い切った隼人は、額にう

つすら汗さえ滲ませていた。その様子に栄は、ふつと息を吐き、首を振りながら隼人に近づいた。わずかに見える口元は、笑いの形に歪められていた。

隼人の目の前までやってくると、栄はおもむろに隼人の肩に手を置き、その目を見つめた。

「ありがとう、な」

まさにはにかみの表情で告げられた短い一言に、隼人は一瞬息を止めた。頬を薄つすら赤く染め、口元の笑いを必死にこらえるように息を詰め、それでもその瞳が幸せそうな光を宿していることは隠し切れない。

普段無表情の人の、滅多に見れない表情には、なんという威力があるのだろうと、隼人は目を見開いて立ち尽くした。そして隼人が呆然としているうちに、栄は今度は本当に立ち去ってしまった。

置いてきばりにされた隼人は、気まずげに頭を掻き、その後視線を下に移して同じく置いていかれた隼人の分のお猪口を見つけた。とりあえず片付けないと、と手を伸ばしたとき、自分より少し大きな手が、横からお猪口をさらっていった。

「……父さん、とつときの日本酒開けたのか」

減ることもなくお猪口に残ったままの酒を、一息に飲み干した八ルが、楽しそうに笑った。

「ふふ、それだけ気になってたんでしょ、母さんの話」

栄が去っていったのと反対側の、西に続く廊下の影から、ナツも姿を現した。隼人は目をぱちぱちさせながら、のっそり現れたふたりに尋ねた。

「ふたりとも、聞いてたんだ……？」

ぼかんとした表情の隼人に、ナツが苦笑して答えた。

「そりゃあれだけ大きな声じゃさ。そこまで大きくないもん、この家。防音設備なんてないし。丸聞こえだよ」

「それにしても母さんも本当に天国にいるんだな。しかもかなり元気そうだ」

ハルは安心したように笑った。ナツもつられる様にしてくすくす笑い出した。隼人は栄とふたりきりで話していたつもりだったが、予想外にギャラリーが居たことに、複雑な心境だった。そんな隼人の顔を見て、ハルは隼人の髪をぐしゃぐしゃと撫でた。

「別に大層な内緒話つてわけでもなかっただろう？ 俺たちの母さんの話だ、聞いて悪いことはない」

「うん……まあ、そうだけどね」

隼人は諦めたように笑った。すると今度はナツが隼人の肩を労う様に叩いた。

「父さん嬉しそうだった。……ありがとな、隼人。母さんからの伝言が聞けるなんて、父さんも思ってただろうな。しかし……」

そこでまったくすくす笑い出したナツを、隼人は不審そうに見た。

「ど、どうした？ ナツ？」

同じくハルが不審そうに問うたのに、ナツは笑いながら答えた。

「いや、あの、母さんの伝言……。はは、見抜かれてるな、父さん  
！」

「……？ ナツは葵さんの伝言の意味が分かったの？」

隼人が意外そうな顔でナツを見た。『しょうがない人ね』の意味  
するところなど、隼人には見当もつかない。

「伝言聞いたときの父さんの顔、苦いもの食ったような顔だった？  
それとも赤くなった？ ああ、見たかったなあ！」

ひとり興奮するナツに、ハルも疑問を浮かべた表情で隼人を見た。

「……？ 俺はさっぱりわからんけど……。うーん、母さんの伝言  
かあ、どういう意味なんだ？」

「いいんだよ、俺はわかつちやっただけど、母さんから父さんへの伝  
言なんだから、父さんだけに伝わればいいのさ」

ナツがようやく笑いを収めてそう締めくくった。自分だけ答えを  
知ってるなんてずるいと、隼人もハルも思ったが、これは面白おか  
しいクイズではないと、そう思い直して諦めた。

一方、自分の飲んだ酒の後始末をするために、どこか台所へ向かっていた栄は、その足を居間の仏壇の前で止めた。いつのまにかそこに飾られていた向日葵の花に、酒瓶を持ったまま大きくため息をついた。

子供たちはみな、向日葵は母親の大好きな花だったと知っている。だからしよっちゅう飾っているし、庭の向日葵も毎年咲くように手入れしている。だがこの花に込められた思いは、栄しか知らない。今でも鮮明に思い出せる。結婚を申し込んだときの、葵の咲き誇るような満面の笑顔。

『ふふ、じゃあ私、“日向葵”になるのね。順番はちょっと違うけど、“向日葵”になれるのね』

唐突に蘇った記憶に、栄は思わずげにため息をつき、その場を離れた。

『しょうがない人ね』

死んだ妻からの伝言。栄は、その意味することをちゃんと知っていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8097z/>

---

神様の絵の具

2012年1月2日11時49分発行